

# ペルー一国日系人実態調査報告書

平成 4 年 4 月

国際協力事業団

RY

移 計
JR
92-6



107/236

# ペルー国日系人実態調査報告書

JICA LIBRARY



1099311(1)

2405/

平成 4 年 4 月

国際協力事業団



国際協力事業団

24054

## はじめに

南米における日本人移住はペルー国移住が最も古く、1899年に第一回移民790人がペルー国へ渡航したのが始まりです。

その後、1923年にペルー契約移住が廃止されましたが、親族呼び寄せなどにより移住は継続し、現在は戦後移住者を含め、約8万人の日系人が在住しているものとみられています。

その数は南米最大の移住先国であるブラジルに次ぐものとなっています。

1966年に我が国外務省により実態調査が行われましたが、二世・三世の世代後退などに伴い日系社会大きく変貌し、その実態把握は現地日系団体のみならず、広く本邦関係機関などの要望するところとなりました。

本報告書は上記の背景の許に、1990年に日本人のペルー移住90周年を迎えたことと併せ、その記念事業としてペルー日系人の人口、経済、社会状況の調査を実施し、その結果をまとめたものです。

1990年には初めて日系二世のペルー・フジモリ大統領が選出されるなど、我が国内外の日系人に対する関心も高まりつつある現在では、ペルーは最早遠い国ではなくなっており、移住者・日系人の活躍する局面が多様化するのとは必定であります。

最後に、本報告書の完成に当っては、日本人ペルー移住90周年祝典委員会、特に森本アメリア委員（国立人文・考古学博物館顧問）に感謝すると共に、本報告書がもたらす情報がペルー日系社会の理解に役立つものとなれば幸甚に存じます。

平成4年4月  
国際協力事業団  
移住事業部長  
楠 木 功



## 序

1988年、「働きながら記念しよう」というスローガンのもと、多数の日系団体から構成される日本人ペルー移住90周年祝典委員会は、翌年に控えた記念行事の準備に取り掛かった。そして多彩にわたる記念事業のうち最重要事業の一つとして、日系人口調査の実施を盛り込むことを決定し、そのための名誉委員会を設置した。

そして、この事業の準備、実行、指導管理を本報告書の筆者が任されることになった。

「ペルー日系人の社会・経済調査」と名付けられたこの事業は、日系人口に関する総合的診断を目的とし、その柱を実態調査においた。また、この事業の実施と並行し、小事業3件が実施に移されることになった。なお、それらのうち2件については、現在推進中であり、残り1件については完成を間近に控えている状況にある。本事業に携わったアシスタントグループが難しい作業を成し遂げてくれたおかげで、専門的な分類ファイルの作成も可能となり、これは今後実施される調査に役立つであろう。

この調査事業の実施にあたっては、多数の調査員の協力参加が必要とされたが、専門家や学生を中心に数多くの協力者を得ることができた。従って、調査結果は日系社会全体の個人や組織単位での並々ならぬ支援と協力の賜であると付記したい。

1989年の実態調査に先立つ実態調査としては、1966年に実施されたものがある。同調査は実態調査特別委員会が実施したもので、その時の調査結果は、1969年に日本語で報告されている。今回の調査にあたっては、この日本語報告書の他、その後1981年にフォード財団の後援のもとに作成された調査報告書を参考資料とした。

この報告書では、今回行なった調査事項のうち、人口、社会・経済面そして文化面に  
関する実態につき扱った。

また、報告書作成に際しては、意図的に実態調査の構成を守ることにした。その目的は、それぞれの調査課程を詳説するとともに、得られた結果の基準を紹介し、同時にその限界を指摘することである。1990年に挙行された総選挙以降、この報告書のタイトルが「現況調査」と呼ばれるようになったように、限界の指摘は今日よけいに必要なことである。総選挙を境に、日系社会に関する出版物がでてきても決しておかしくない状況にある。しかしながら、それらの中には決まり切ったことにしか触れていなかったり、異常なまでに思惑的なものであったり、周知の情報を扱い、既刊情報の複製版以外のなにもの

もないものがあるのも事実である。

今回の調査で得られた総合結果は、写真と同様、ペルー日系社会の歴史上の一齣に過ぎない。そして、まさにその時点経過後に、大きな変化が日系社会そして日系人について起きているのは事実である。一つには、日本への出稼ぎ移民が記録されてきたことである。この傾向は、今回の実態調査実施以前、いわゆる「1988年のブラック・セプテンバー」に始まり、調査実施中も記録されていた。特に1988年9月以降の数ヶ月間には、その傾向は加速されていたようである。この傾向は、日系社会にそれなりの影響をもたらすことは不可避で、本報告書でもそのことに触れた。他方、1990年にペルー日系人が共和国大統領に選出されたことで、ペルー日系人が意図に反し注目されたのは事実であるが、日系大統領を輩出したことは、ペルー日系社会にとってだけに止まらず、画期的なことであることは疑う余地がない。



## 感謝のことば

本事業の責任者として筆者個人の名で、次の機関、各位に感謝の意を表す。

本調査実施以前から信頼と支援を寄せて下さった、増田昭三博士。

本調査の円滑な推進のため事務的な便宜を図って下さった小波津エレナ氏始め、実態調査委員会委員各位。

本調査を後援し、独立形態で調査を実施させて下さった、丸井ヘラルド氏を委員長とする90周年移住祝典委員会

移住祝典委員会を通じ経済的支援を下された、トヨタ財団

調査用機器本部として施設や設備の便宜供与を下された、ペルー日系文化財団（日本人ペルー移住資料館）とペルー日系人協会（日秘文化会館）。

本事業を理解いただき、全国各地で調査員に協力下さった各種日系団体各位。

本報告書作成を可能にして下さった日系社会及び調査員各位。

日本人ペルー移住90周年祝典委員会

実態調査委員会

増田昭三博士

顧問・名誉委員

小波津エレナ

委員長

委員

飯田フアン

荒城直義

諸見里アントク

三浦アウグスト

山本マリー

仲田忠司

ペルー日系人の社会・経済実態調査事業

調 査 員

総合指揮	ボソイグリオ ジョバーニ
モリト マリア	チェ マグダレーナ
アシスタント	フィールドワーク コルディネーター
マツジ タミ	ヤマモト マリ
オカ マリエ	コヤマ ベイ
イトウ アンハロ	監督者
オチ メイル	アニキ オシロ ティーノ (リマ)
総合企画	アニキ オシロ ハロルド (ウカヤリ)
ハヤシ ホルハ	チヤベス イシイ イバン (リマ)
端末オペレーター	チャング ミヤザキ ラファエル (リマ)
タカ マリア セシリア	チネン イシカワ ホルハ (リマ)
カワシタ ナンシー	フクナガ スルコ ジャクリン (アヤク-チョ)
トハラ ミラグロス	フルタニ トミカワ ロサ (ランバイエ-カ)
モリト マリア ルルデス	ハタダ エンドウ シルビヤ (ラ リベルタッド)
ロアサ ナタリー	イリモト イトウ アウグスト (リマ)
ドラント ルシー	ウサカ ミヤシロ サンティアゴ (ピウラ)
フクシマ ルシー	マルヤマ リカルド (リマ)
ニシムラ バトリシア	クツマ サメシマ セルビオ (フニン)
トスカ マリア ルイサ	マスマタ タナカ フェルナンド (リマ)
特殊プログラム担当、技術顧問	マスカ アルバ バグロ (カニエ-テ)
アランブル アルフレド	マツダ カネオ ロサリオ (リマ)
モラーレス ハビエル	マツジ タミ (リマ)
トレス アントニオ	ナカホド バスケス ノルマ (リマ)
1966年実態調査結果を基準とした	ナコ キナ ジョラング (リマ)
人口動態推移予測担当	オオムラ ジェッシー (クスコ) (次頁へ続く)

(監督者) (前頁から続き)

オクヤマ ヤマダ デニス (リマ)  
オオシロ ウンテン バブロ (イーカ)  
ロセリョ イチヤナギ マヌエル (リマ)  
サイトウ オカダ セルビオ (リマ、イキートス)  
サカモト サンチェス エンリーケ (サン マルティン)  
タカハシ ベンツラ セサル (マドレ デ デイオス)  
タケダ ホンマ グラディス (ワラル、テヤンカイ)  
トハラ ナカザ ロシオ (リマ)  
ウエハラ シロマ ダンテ (リマ)  
ウルダニエス コナミゲル (モケダ、タクナ)  
ウエキマ シバク セサル (リマ)  
バスケス コバシガリ フリオ (ツルヒーリョ)  
ユズリハ ヤカビ フアン (マ-チョ)

訪問調査員

アグエナソナン リカルド  
アグエナ トヤマ フアン ルイス  
アニキ オオシロ ティーノ  
アニキ オオシロ ハロルド  
アラカキ サクダ ジェニイ  
アサイ ナガト ラファエル  
ブロムレイ カナシロ イネス  
コンドル シンサト モニカ  
コルネリオ キヤン リリアーナ  
チャンダ オオシク カルラ  
チャバス イシイ イバン  
チャバス オギツカ エンマ  
チネン イシカリ ハビエル  
チネン イシカリ ホルハ

チネン ヤラ ナ  
ドイ ホンダ ビルビニョ  
ドラント ナゾ エルシー  
エスピノサ ゴヤ アル ツーロ  
フジモト ヒラミネ ルス  
フクチ フクシマ カルロス  
フクナガ スルコ ジャクリン  
フルカリ キンジョウ ファビオラ  
フルタニ トミカワ ロサ  
ガリヤ ガルシア フアン  
ガシヤ ガシヤ ホルハ  
ギブ シマダクロ リカルド  
ハジ アロ-ヨ アルド  
ハジ アロ-ヨ カルロス  
ハタダ エンドウ シルビオ  
ハヤシ コナミ ロサ  
ハヤシ オクヤマ イバン  
ハノビ ナカホド ロサ  
ハシキ ナカマ ルイス  
ハシキ シンサト ベドロ  
ヒガ アラシロ ビクトル  
ヒガ ヒガ ベドロ  
ヒガ キンモト ロランド  
ヒガ ヤラ リー  
ヒロタ マエダ ドーラ  
ウルタード タマヨシ カティア  
イグエ ナカマ アメリヤ  
イナダ ツカザン カルロス  
イナフク イナフク ルイス (次頁に続く)

(訪問調査委員) (前頁から続き)

インチャウステキ ハヤカリ カルメン

インファンテ エスコバル リカルド

イシキ タマシロ アナ

イシザリ マスダ イグナシオ

イワモト イトウ アウグスト

カデナ ヒラシケ ジョニー

カミモト タイラ ハビエル

カミヤ オド ジェーン ビエル

カナシロ ミヤシロ ミルトン

カナシロ ミヤシロ ネイデ

カワハラ サトウ グスターボ

カワヒラ サキハマ ナンシー

コハシカリ モロミサト セシリア

コハツ ヒラノ ホセ

コハツ タマシロ ハビエル

コミヤ ヨコタ ミゲル

クサダ ヤマシロ サン

クツマ サメシマ セルヒオ

ロアイサ フジイ ナタリー

マキナガ ゲェバーラ フリオ

マンヤリ ウツノミヤ セルヒオ

マスムラ タナカ フェルナンド

マスムラ タナカ シルビア

マスオカ アルバ バトロ

マスダ マタヨシ アンヘリカ

マツダ マタヨシ サムエル

マツダ リタナベ

マツフジ キノ ジョアクリン

マツフジ マツオカ ルイス

マツモト モリコネ ベロニカ

ミギタ ヤカビ ミリアン

ミナミ ヨシヤマ ベドロ

ミナミ ヨシヤマ ロシオ

ミヤシロ キケン アナ

ミヤシロ イハラ カルロス

モリモト ソネ マリア

モロミサト シロノシタ エリアーナ

ムラカミ オオシタ ホセ

ムラカミ ヤマサキ ヘンリー

ムロヤ マキノ オスカル

ナカガワ エンドウ マリアーナ

ナカホド バスケス ノルマ

テイアゴ ナカモ モロミサト オマル

ナカノ ヒガ ナンシー

ナカノネ イナフク ゴリエルモ

ナカノネ イナフク マリオ

ナカノネ タマシロ マリア

ニシムラ ドイ マリベル

オガタ ハヤシ マリエラ

オオムラ オオムラ ジェッシー

オリウエラ カワムラ エファリン

オオシロ アカミネ ハビエル

オオシロ ホシノ レオナルド

オオシロ カンザト リサベル

オオシロ ウンテン クラウディア

オオシロ ウンテン バトロ

オオシロ ウンテン ビエロ (次頁に続く)

(訪問調査員) (前頁から続き)

ロドリゲス ヒラミネ マルコ

ロドリゲス カワハラ ミラグロス

ロセリョ イチヤナギ マヌエル

サイトウ オカダ セルヒオ

サカイ イタバシ エドワルド

サカイ イタバシ フェルナンド

サカモト サンチェス エンリーケ

サウダ カナシロ ルイス

サトウ クロス リカルド

シマブク タカエス ミゲル

シライシ モロミザト マルガリータ

スガ ホソノ フリオ

タガミ オオシタ リカルド

タカハシ ベンツラ セサル

タカノ アブラタニ マリオ

タカノ ヤマシロ フアン

タカノ ヤマシロ シルビオ

タケダ ホンマ グラティス

タケダ ホンマ フアン

タマシロ タカノ ルイス

タナカ トチオ マリア

タオ カンサト ホルヘ

テルヤ カナシロ フアン

トハラ ナカザ ミラグロス

トハラ ナカザ ロシオ

トカシキ キシモト ラファエル

トケシ ナカヤマ エディオ

トスカノ グスマン マリア

ツカザン ナガミネ エステル

ツツミ ケバス ベドロ

ウエハラ シロマ クラウディア

ウエハラ シロマ カリン

ウルダニエス コナミ ミゲル

ウシジマ クルス イベッテ

ウエハラ ヒガ カティ

ウザ ミヤギ セサル

バスケス コバシガリ フリオ

ビリヤコルク サトウ フェルナンド

ビリヤコルク サトウ ミゲル

ワタナベ イワブチ ルイス

ヤギ アカミネ ハジロ

イハ シマザキ フアン

ヤマモト ツダ ロベルト

ヤマシロ アラカキ ハラルド

ヤマシロ 早木 モニカ

ヤマシロ ベティ

イー キヤン ロリン

イケダ ヤマシロ セシリア

イノウエ スイコ カルロス

ヤング タイラ ハビエル

ヤング タイラファエル

ナカマ ミリアン ユミ

ユスリハ ヤカビ フアン

小事業:

アイデンティティと政治について

情報処理とコード化 (次頁に続く)

(訪問調査員) (前頁から続き)

ロケス フラディス

デヒノーバ エステル

デアラキ アナ

ドランド エドワルド

アラソブル アルフレド

アンケート調査員

オヤカリ オリエラ

ゴチ マイレ

小事業: 農業について

調査員

アラキ ラウル

アシスタント

イトウ アンハロ

小事業: 専門家について

コーディネーター

アラキ ラウル

アシスタント

タナカ マリア セシリア

マリモト マリア ルーテルス

トハラ ロシオ

イトモ アウグスト

イトウ アンハロ

管理

タナカ 初イ

イトミネ 理

ヨシダ 伊呂

リノ ラウル

## 用語の定義

- 日系 日系人の“人”が脱落したもので、日本国外に在住する日本人をさす。本文では、日本人の血を受け継いでいる者という意味で使用した。従って、この言葉には、移住者とその子孫が含まれる。
- 一世 日本人移住者。
- 二世 日本人移住者の子供。
- 三世 日本人移住者の孫。
- 四世 日本人移住者の曾孫。
- 五世 日本人移住者の玄孫。
- むじょう、禱 死者の供養のために営む仏事。
- 仏壇 死者を記念する位牌や供物を安置する小さな壇。
- 位牌 死者の名を漢字で記した木牌。
- 神棚 通常、神宮を模した小さな家具で、この棚に向かい礼拝を行なう。
- 箸、お箸 食事するに用いる細く小さい2本の棒。



## 調 査 背 景

ペルー日系人の歴史は1899年に始まる。すなわち、この年に日本人のペルー移民第一陣の入国が記録されたのである。その後も1923年まで、海岸地帯に所在する農場で賃金労働者として働くために来秘した、いわゆる契約移民者の入国が続き、その数は成人男女、子供を合わせ、約1万8千人に達した。

その後、親族、友人等の呼び寄せによる自由移民が記録された。この時期に入国した移民者は都心部に落ち着き、小さな商いを始めたり、民芸品作り、あるいは、理髪業といったサービス業を営んでいた。職を変えたり、店を構え、更にそれを発展させていったかどうかは、働いて貯めた個人の資金力や移民仲間の協力次第であった。

他方、移民者同志が集まり、なんらかの形での組織作りが、農場で働く移民たちの間に起こった。契約移民者は、出身地別に各地の農場に配置されていたため、同郷の仲間が集まり、主に労働条件について集団抗議を行なうようになった。一方、都心に近いところに入った者は、移民者同志が一部地域に集中していたこともあり、同業者組合や同志会のような、それまでとは違った形態の組織も結成されるようになり、故郷の慣習に浸り、祭りごとなども祝えるようになっていた。

しかしながら、こうした団体活動も、第二次世界大戦の勃発で、停止せざるを得なくなった。大戦中、時のペルー政府は、米国との同盟国宣言を行うと同時に、枢軸国の市民（ドイツ人、イタリア人、日本人）が経営する商業、金融活動に対し、一連の営業停止令を発布。また、学校や同志会の施設を接収するとともに、千人を超す日本人や日本人を親に持つペルー人を、アメリカ合衆国に→向け強制退去させた。

終戦後、戦前に結成された組織が復活したり、戦前に誕生した世代や若い移民者達を中心となっていくつかの団体が創設された。

また、移民者の職業も多岐多様化されるようになり、移民者の間で社会経済的格差が記録されるようになった。これは、移民者一人一人が選んだ道が違ったために生じるようになったもので、その格差は戦後顕著になってきた。

現在まで、日系人以外がとらえている、日系人の人種的及び文化、社会・経済一般に関する特徴によれば、日系人は統一性があり、また同質的でありと、いろいろと決まり切ったことが言われている。

しかしながら、現在、日系人に関する情報はどちらかといえば不足している。何人ぐらいいて、どんな人種なのか。現在は何世代までいるのか。これが、本事業開始にあたり、投げ付けられた最初の疑問であった。

集団調査の実施が可能だということになり、日系人に関する総合的診断を目的とした事業の企画がなされ、その主要作業を全国日系人実態調査とした。またこれに付随する小事業として、日系人のアイデンティティと政治、更に農業に関する調査が計画され、現在推進中である。また同時に企画された専門家に関する調査事業は、すでに完了しており、その調査結果は、本文でも言及している。

これまで実施された調査としては、1966年に“在ペルー日系人実態調査”委員会が実施した実態調査があり、同調査結果をまとめた報告書は、1969年に、日本語で発表されている。また、1980年から1981年にかけて、フォード財団の後援で、日系人口と職業に関する調査が実施されている。この調査結果については、その一部が報告書にまとめられている。これら過去2回にわたる調査資料は、今回の実態調査結果の比較資料として参考とした。

1966年の実態調査結果によると、当時のペルー日系総数は32,002人と記録されている。その後、人口増加率から算出された人口動態推定値がいくつか発表されてはいるが、そもそも正確に設定された増加率データを欠いているため、色々な想定に基づく増加率が使用されていた。第1回実態調査から今回の実態調査実施までには23年が経過しており、当然様々な変化が生じていたはずで、より現実に近い参考データを設ける目的で初回の実態調査から今回の実態調査実施の年までの人口動態推計を行なった。

調査対象は全国に散在する日系人全員とし、1899年に入国した者を最初の日本人移民者とした。また、混血化と社会・経済面に関する調査においては、日系家族の一員となっている非日系人の親族も調査対象に入れた。

この調査の総合目的は、異なる角度からみた日系人の現況調査記録を残すことであり、そのためには、まず各調査項目につき、過去の調査結果を基準とした想定→や指標を決定した。調査事項は大きく分けると、人口、社会・経済面そして文化面に関するもので、用意した調査事項に世帯単位の回答を求めることにより、それぞれの項目に記録された変遷、その程度または規模の統計的把握を意図した。

以下、本文では、今回適用した調査方法と調査結果を詳細に紹介する。I章では、調

査方法及び調査項目につき、更に明確に説明すると同時に、事業実施に至るまでを詳説する。Ⅱ章では、それぞれの限界に触れながら調査結果を紹介、1966年の実態調査及び1980-81年の調査結果を基準とした分析を行なう。そして最終章では、調査の総括と結論を述べることにする。



## 目 次

	頁
はじめに	
序	
感謝のことば	
実態調査委員会	
調査員	
調査背景	
I. 調査方法	1
目的、調査手段、調査対象、調査対象単位の情報獲得、 公報活動、訪問調査員の研修と選抜、訪問調査:組織と スケジュール、データ処理	2
II. 結果分析	11
a. 人口:年令と世代、年令と性、既婚・未婚等 <sup>マ</sup> と年令 及び世代、地理的分布、 <sup>リマ</sup> への人口流入、外国への移住、混血化と 非日系人との関係、学歴、家族構成(一世の出身地と家 族数) 死亡率と出産率	11
b. 社会・経済面:職業、職種、会社、サービス業、商業、生産業 最多企業、専門家、居住地区、所有する財	63
c. 文化面: 宗教、食事、音楽、言語	88
III. ペルー日系人現況調査	97
参考文献	107
付録	111
1. 1989年実態調査質問用紙	112
2. 公報活動:ポスター	114
3. 訪問調査員のための調査手引き	115
4. データ処理:コンピュータープログラム	134
5. 1966年実態調査結果を基にした人口動態推移予測	135

表 一 欄 表

1. 年令、世帯別日系人口 (1989年)	13
2. 1966年実態調査実施後の出生者数	14
3. 世代別人口比較(1966年、1989年)	14
4. 年令・性別日系人口 (1989年)	15
5. 年令・性別一世人口(1989年)	16
6. 年令・性別二世人口(1989年)	17
7. 年令・性別三世人口(1989年)	17
8. 年令・性別四世人口(1989年)	18
9. 年令・性別日系総人口(1989年)	18
10. 年令・性別一世人口(1989年)	20
11. 年令・性別二世人口(1989年)	22
12. 年令・性別三世人口(1989年)	23
13. 年令・性別四世人口(1989年)	25
14. 年令・性別五世人口(1989年)	27
15. 世代と性別人口推移(1966年と1989年)	28
16. ステータスと年令別日系人口(1989年)	30
17. ステータスと年齢別一世人口(1989年)	30
18. ステータスと年齢別二世人口(1989年)	31
19. ステータスと年齢別三世人口(1989年)	31
20. ステータスと年齢別四世人口(1989年)	32
21. ステータスと年齢別五世人口(1989年)	32
22. ステータスと性別日系人口(1989年)	33
23. ステータスと性別一世人口(1989年)	33
24. ステータスと性別二世人口(1989年)	33
25. ステータスと性別三世人口(1989年)	33
26. ステータスと性別四世人口(1989年)	34
27. ステータスと性別五世人口(1989年)	34

28. 年令ステータス性別一世人口(1989年)	34
29. 年令ステータス性別二世人口(1989年)	35
30. 年令ステータス性別三世人口(1989年)	35
31. 年令ステータス性別四世人口(1989年)	36
32. 年令ステータス性別五世人口(1989年)	36
33. 日系人口県別分布(1989年)	39
34. 1966年と1989年の実態調査結果比較表:日系人口の県別分布	40
35. リマ県における日系人口推移(1966年と1989年)	42
36. 他県からリマ県への人口流入数(1989年)	43
37. リマ首都圏とカヤオにおける在住期間	43
38. 世代別リマ首都圏とカヤオにおける在住期間	44
39. 動機別アメリカ合衆国への移住者推移	46
40. 動機別日本への移住者推移	46
41. 日本への移住者1988年～1989年	46
42. 日本への移住者1988年～1989年	47
43. 年令層別日系人口(1989年)	49
44. 日系人との関係及び性別非日系人口(1989年)	49
45. 学歴と世代(1989年)	52
46. 家族形態(1989年)	53
47. 一世の出身県別世帯数	55
48. 沖縄県内出身地別世帯総数	55
49. 沖縄出身世帯数	56
50. 世代、性別世帯主	57
51. 性別・死因別死者数	58
52. 年令・性別病死者数	60
53. 年令・性別病死者数:一世	60
54. 年令・性別病死者数:二世	61
55. 年令・性別病死者数:三世及び三世以降の世代	61

56. 出産率と世代 .....	62
57. 世代別子供の数 .....	63
58. 結婚から第一児出産までの期間 .....	63
59. 職業 .....	64
60. 活動部門・職種別経済人口分布 .....	65
61. 日系経済人口活動部門別比率推移 .....	65
62. 日系経済人口職種別統計 .....	67
63. 公務員数 .....	67
64. ペルー全国とリマ県にみる職業別日系経済人口 .....	68
65. 活動部門別日系人経営事業(1980年) .....	70
66. 部門及び所在県別日系経営事業数(1989年) .....	70
67. 活動部門別リマ県内日系経営事業数(1989年) .....	70
68. 活動部門別リマ市内日系経営事業数 .....	71
69. 日系経営者数:サービス業(1980年) .....	72
70. 日系経営者数:サービス業(1989年) .....	73
71. 日系経営事業数:商業部門(1980年) .....	74
72. 日系経営事業数:商業部門(1989年) .....	75
73. 日系経営事業数:生産業部門(1980年) .....	77
74. 日系人経営事業数:生産業部門(1989年) .....	78
75. 日系人経営事業で多い業種(1980年) .....	79
76. 日系人経営事業で多い業種(1989年) .....	79
77. 専門分野日系専門家数の推移 .....	80
78. 日系専門家(1989年) .....	80
79. 居住地別日系人口(1989年) .....	85
80. 居住地別日系人数 .....	85
81. 持家・自家用車所有の別 .....	87
82. 家庭内の娯楽 .....	88
83. 宗教 .....	89
84. ホウジョウ、法事 .....	89



85. 神棚、仏壇及び/または位牌がある家庭	89
86. 日本食を作っているか	90
87. 日本食	91
88. 箸の使用状況	91
89. 日本の音楽について	92
90. 外国語の習得状況	93

図 一 覧 表

1. 年令・世代別日系人口	12
2. 日系人口世代別比率	14
3. 年令・性別日系人口	15
4. 日系人口の地理的分布(1989年)	38
5. 日系人口の地理的分布(1966年)	39
6. リマ・カヤオにおける日系人口分布	42
7. 非日系人との関係	48
8. 学歴と世代	51
9. 移民者の出身地(都道府県別)	54
10. 日系経済人口:活動部門と職種	66
11. 宗教	89
12. ペルーにおける日系人口: 日系人の居所を掴むため利用した情報源	98
13. ペルーにおける日系人口:日系人同志の関係	99



# I. 調 査 方 法



## I 章 調 査 方 法

調査方法については、いくつかの方法を採用した。そのうち柱となったのは全国各地で行なった社会・経済実態調査で、その他については、必要に応じそれぞれ適切な方法を行使した。

### 社会・経済実態調査

日系人という特徴をもった人種集団の実態調査については、その実施方法に色々な基準があるであろう。しかしながら、ここで明確にしておくべきことは、日系人は、通常、その人種的な特徴のほか、特定機関に所属していること、そしてその血縁関係、連帯意識や文化的近似性により、特徴づけられている一方、ある種の経済活動に関与している場合でさえ、過去2回の調査によれば、活動の多様化が顕著となっており、同様に、日本人以外の外国人移民者やペルー以外の国における日系人口と異なり、地域によっては日系人が集中しているところはあるようだが、ゲットーのような日系人住居地域の誕生はなかったことである。こうした状況下において、実態調査を実施するにあたり、日系人を一人残さず探しだすには、職業別または住所別といった一般的な公式記録や単に地域別に見るだけでは不可能であったろうと思われる。

1966年の実態調査時と同様、1989年の実態調査においても、県人会網と血縁関係を利用して第一期調査を行なった。しかしながら、こうした基準により調査を実施することには限界があり、日系人口の一部、しかも、おそらくは、かなりの数の日系人が、そのような枠から外れている可能性がある。そのため、以上の他にも多数の方法を用い、近年加速化している非日系人との婚姻ケースの場合のように、混血化やペルー人社会への同化課程のなかに埋もれている人口をも網羅し、調査漏れを最小限に止めるよう努めた。

他方、現状に即した統計バロメーターを設ける目的で、1966年の実態調査結果を基に、人口動態推計を行なった。この具体的目的は、各段階での実態調査実施時点での当該進捗率推定を図れるようにするとともに、なんらかの理由で実態調査が完了不能となった場合代替可能な推定値を求められるよう、その統計基準を備えておくことであった。

a. 目的

この実態調査の総合目的は、特定事項につき統計資料を備えることであり、既存の調査結果から類推可能ないくつかの想定をその基準とした。調査対象事項は、人口、社会・経済面及び文化面であった。そして各事項ごとに質問項目や指標を設定した。

a. 1. 人口： ペルー日系人の現在数はいくらか？ 現在は何世代まで誕生しているか？ 年令別、性別、世代別人口や既婚者、未婚者等ステータスの別は？ 結婚相手は？ 今だに日系人同志の婚姻に固執しているのか？ 死亡率、死因は？ 外国への移住者数と移住の動機は？ 日系人全体の学歴と世代別の学歴差は？ 家族構成は？ 一世の出身地別分布は？ 1966年の実態調査時との違いは何か？

a. 2. 社会・経済面： 職業は？ 日系経済活動人口は？ 過去2回の調査時（1966年実態調査と1980-81年の調査）と比較した職業動向は？ 第三次産業（商業とサービス業）に従事している者が従来同様多いのか？ 生産業や他の経済活動従事者は増えているのか？ 専門家や会社員の数が増えているのか？ 日系人にとり伝統的となっている活動や職種以外への従事状況は？ 日系人全体にとり主だった雇用機会提供者はどこか？ 経済セクター別分布は？ 既設企業の種類は？

以上の質問事項に含蓄される職業面での指標に加え、社会・経済面に関する調査には、居住地分布、持家及び自家用車所有の別を始め、クラブ等の会員権所有の別、最終学校名、就学率、娯楽活動（観光、会員となっている動産）を考慮に入れた。しかし結果的には、収集した情報の量とその複雑さから、主要項目である職業、居住地区、娯楽及び所有物件のみを考慮することとした。

a. 3. 文化面： 日常観察していたり、過去2回の調査結果から、ペルー日系社会では、混血化やペルー人社会への同化が進んでいる一方で、ある種の日本的表現や慣習が今だに根強く残っており、それがなにかを突き止めることができた。日本語、日本食、日本の宗教や音楽は日系人の生活にどの程度取り入れられているのか、また、これらと関連し、今も使用を続けているもの、例えば、箸の使用は？ 葬儀はどのように営んでいるのか？ 同

様に、日常の娯楽活動に関連した質問を取り入れた。これは社会・経済指標の一つであると同時に、文化的な面につき、どのような手段で日本の文化と接近しているのかを知るのに役立つであろうとの点から取り入れた。

#### b. 調査手段

今回の調査では、以上に言及した事項に関する調査を実施し、日系人口に関する詳細にわたるファイル作成を可能とする情報収集を目的とし、独自に作成した調査用紙を使用した。

この調査用紙は、コンピューター処理を考え作成されており、回答は家族単位で行なうよう設計されている（付録1参照）。

#### c. 調査対象

同一住居に住み、生計を共にしている血縁者、姻族、近親者全体を一単位として分類し、経済家族単位と呼び、これを今回の調査対象単位とした。なお、この経済家族単位内で一時的な不在者は調査対象とし、また非日系の一時的逗留者や使用人は調査対象から外した。

過去2回の調査時と異なり、今回は各日系人の家族単位を調査対象としており、そのため本報告書の一部では家族内に非日系人の姻族がいる世帯についても考慮されている。

#### d. 調査対象単位の情報獲得

今回の実態調査は数段階に分けた実施を企画し、その基準は集団に係わるネットワークの理論とした。この概念を応用したのには2つの目的があったため、従って結論も2つ得られた。すなわち、一つは、調査対象単位に関する情報を得るという実践的な目的で、もう一つは、同概念を応用することにより、日系人口あるいは集団の機能や動向を把握することであったが、前者の目的を満たしたのみならず、後者についても成果を上げることが出来た。

この概念によれば、同類グループ集団の構造や機能は、一定団体組織の繋がりや親戚関係の繋がりをベースにして成り立ち、それは複雑な網を形成するとさえいわれるものである。このような考え方に従い、企画の第1段階は、団体組織や機関の登録者のデータを可能な限り集めることとし、こうして集めたデータは、それぞれ照合し、データの重複がないかを調べた。こうして、氏名と住所を記載した調査原簿を作成した。この初期原簿を使い、実地調査を開始。こうして調査対象人口の一部につき調査を完了した。この詳細は先にいって扱うことにする。

他方、調査専門事項のなかに、日系団体組織に所属していないがために初期段階で調査対象になっていないと思われる家族や個人名とその住所を尋ねる質問を組み入れ、この質問に対する回答を基に前記の調査原簿に記載されていない人たちのリスト作りを行なった。こうして得た情報は、当初の調査原簿と照合後、第二の調査原簿作成に役立った。この作業は、団体組織会員の親戚関係や人間関係から知り得る限り、最大限手を尽くし行なった。

第3段階は、どの団体組織とも繋がりがなく、日系社会の活動にも参加せず、日系人家族とは姻戚関係もない人たちを探し出すことであった。この目標達成には、リマ県の電話帳を利用した。リマ県の電話帳にしぼったのは、1966年の実態調査結果によれば、日系人口の84%強がリマに在住していることが明らかになっているからである。また電話帳のほか、経済活動に関する全国登録台帳をいくつか利用した。しかしながら、最も効果を発揮したのは、全国紙に掲載した新聞広告や、日系人が多く住む地区や貧困地域において通りごとに尋ね回ったことであった。この段階での原簿の作成と訪問調査は、多くの場合、第1段階や第2段階の調査と並行して行なった。これは、訪問調査員が第一期及び第二期原簿に基づき調査対象世帯を連日訪問しながら、それなりの情報を得られたからである。

#### e. 広報活動

国内の社会情勢が悪い状況下でもあり、比較的広範囲に及び、かつ、プライベートな内容も含む質問事項への回答を拒否されるのではないかと懸念したのは当然のことである。しかしながら、何段階かにわけ色々な手段を用い、本調査実施に関するキャンペーンを積



極的に行なっていたため、そうした拒否反応は最小限に食い止められた。

初期の段階でのキャンペーンは、頻繁に日系社会の活動に参加している人や、その人たちとなんらかの関係のある者を対象とした。この段階ではメディアとして日系新聞を利用、ペルー新報とプレンサ日系の2紙に広告を出した。また、いずれの新聞も本調査に関する記事を報じたり、コメントを掲載するなど、公報活動に協力してくれた。同様に、約60の各種日系団体の幹部にチラシを配布し、本調査につき各団体の会員に知らせるよう依頼。またポスターも配布し、それぞれの団体の施設や、商店、レストランなど日系人が頻繁に訪れる所に貼付けるようにした（付録2参照）。

また、各世帯宛てに通知を用意し、本調査の動機や目的を説明、責任者や責任機関の名を明らかにするとともに、回答として提供される情報の秘密厳守を約束した。この通知は、訪問調査員が調査対象世帯を訪問し、質問を開始する前に手渡すことにした。

最終手段としては、団体組織や友人、親戚関係からも漏れている人や世帯を対象とし、全国紙に広告を出すことにし、その選択基準は、発行部数が多く、よく読まれている新聞とした。

最後に、これは今回のひとつのエピソードといえるのだが、普段日系社会と接触のない人たちの間では、本調査のことを知り、本調査に参加すれば、将来なんらかの恩典があるといった噂が流れただけでなく、実態調査の広告と日本での雇用口提供を結びつけて考えた者も多く、ある意味ではキャンペーンの効果をあげる結果になった。事情説明を行なったにもかかわらず、様々な動機で集まった人々は全員が最終的には本調査に協力する結果に終わった。他方、誤った情報を統計対象とする危険性については、質問自体が的確な回答を求めるものであったため、その危険性は縮小された。疑問の余地が残る回答については、情報処理時に処理対象から外し、考慮に入れていない。

#### f. 訪問調査員の研修と選抜

実地調査を担当する訪問調査員の募集は、ペルー新報とプレンサ日系、更に日系青年団体及び県人会を通じ行なった。訪問調査員の条件は、年令18才以上、高校以上の学歴を有する青年とした。訪問調査員に日系青年を募集したのには2つの理由があった。一つは、日本語の名前や単語を聞き分ける能力があると思われたこと。そしてもう一つは、調

査を受ける側が、調査員が日系青年の方が信頼がもてるということで、この点は最も重要な点であった。こうした配慮がどの程度作用したかは不明ながら、1万1千件以上に登る調査件数のうち、調査を拒否されたケースはわずか2件という好成績に終わった。

訪問調査員の研修と選抜は、約3週間にわたり行なった(1989年1月)。研修内容は、説明会、試験調査及び評価に分かれていた。このうち、試験調査では、調査員が調査作業と質問事項に慣れるのに役立ったと同時に、調査全体の流れをみ、調査質問事項の有効性を測定するのに役立った。この研修期間経過後、ほぼ全国にわたる実地調査作業に担当する青年162人の選抜を行なった。一部地方については、研修のためにインストラクターをリマから派遣した。

選抜された訪問調査員は、グループに分けた。グループの規模については、訪問区または市の調査対象世帯数により決定。コーディネータは訪問調査員間の互選による監督者が担当した。訪問調査員の訪問先振り分けにあたっては、各訪問調査員の出身地を配慮し、基本的には、各自の居住地周辺地域の訪問調査をするようにした。但し、一部地方については、リマから訪問調査員を派遣した。

最後に、各訪問調査員には実地調査作業のための資料として、信任状と訪問調査実施及び一部使用コードに関する手引きを配布した(付録3参照)。

#### g. 訪問調査：組織とスケジュール

実態調査の訪問調査に際しては、リマ市内と一部地域は区単位で、それ以外の都市では市または県単位とし、計67の調査地域に分けた。リマ県では、リマ市の39区とワラル市、チャンカイ市、ワチョ市、バランカ市、スーペ市、パラモンガ市、カニエーテ市、マラ市につき、一部は区単位、一部は市単位で考慮。更に、ラリベルタッド県、マドレデディオス県、フニン県、アンカッシュ県、ランバイエケ県、ピスコ県、サンマルティン県、ロレート県、ピウラ県、アレキーパ県、ワヌコ県、ウカヤリ県、クスコ県、アヤクチョ県、ツンベス県、イーロ県、タクナ県、カハマルカ県及びセーロデパスコ県内の市や区も、それぞれ地域単位として考慮した。

この調査対象地域は、過去2回の調査、特に1966年の実態調査結果や、種々の情報源からの情報(県人会や個人的な情報提供者等)及び前出の方法で適時作成された調査

原簿（d項）を基に、決定した。

訪問調査は1989年2月上旬に開始した。まず、リマ県（リマ市、カヤオ市、ワラル市、チャンカイ市、ワチョ市、バランカ市、スーペ市及びカニエーテ市）、フニン県（ワンカーヨ市、ハウハ市、タルマ市、チャンチャマーヨ市、サティーボ市及びコンセプシオン市）、ピウラ県、ツンベス県、アンカッシュ県とアヤクーチョ市、ワヌコ市及びプカルパ市から始めた。続いて3月には、クスコ県、マドレ デ ディオス県、サン マルティン県、モケグア県、タクナ県及びイキートス市で実施。4月には、リマ市とアレキーバ市内での訪問調査を継続した。

訪問調査実施の時期は地域により異なったが、情報は1989年1月31日現在のものに統一。また同年11月と12月に、上記の期間に調査対象から外れた人を対象とした訪問調査を実施したが、この場合も情報は1月31日現在に限った。

#### h. データ処理

調査期間中で最も難儀だった作業は、初期の段階においてと、訪問調査実施後コンピューターへの情報入力前に行なった、調査原簿の照合チェック作業であった。この作業は、エラーや重複の可能性を最小限に止める目的で、情報処理後も続けた。この点についても調査アシスタント達が熱心に作業してくれたお陰で、調査結果については信頼性の高さを誇れる。

情報処理プログラムは、訪問調査で得られた情報を、調査用紙の質問順に入力し、また各指標の統計や相関を把握できるよう、設計されていた。このプログラムの分析項目は計100項目で、分析結果については、次章で詳述する。（プログラムに関しては、付録4に報告する。）

コンピューターへの情報入力には約4ヵ月を要したが、途中結果報告は1989年8月の講演会において紹介した。しかしながら、その後も調査原簿の再調整作業を継続していき、なんらかの理由で初期の訪問調査時には調査対象外となった人を対象として再度実施した訪問調査により得られた情報の入力を続行した。このように長期にわたる調査の結果取得された情報量はかなりの量になり、それらの情報は集約し、表にまとめた。それらの表は次章で紹介、説明することにする。



## II. 結果分析



## II章 結果分析

本章では、人口、社会・経済面、文化面に分けて実施した調査の統計結果を紹介し、その分析を行なう。なお、各項目毎に、事業目的に基づいた一連の指標と相関関係を考慮し分析を行なっていく。

人口面で考慮した指標は、年令、性別、世代、既婚・未婚等個人のステータス、人口の地理的分布、混血度、非日系人との姻族関係、国内における転出入、外国への移住状況、学歴、家族構成、出生率、死亡率関連とした。

社会・経済面での指標としては、職業、居住地、所有する資産を考慮した。また各指標を突き合わせるにより、日系人口の社会・経済的水準別の分類も試みた。

文化面については、大きく分けて4項目とし、食事、宗教、音楽及び言語を対象にし、またこれらに関連し、箸の使用状況、宗教的儀式、娯楽活動としてのクラブ等の会員権等につき調査した。

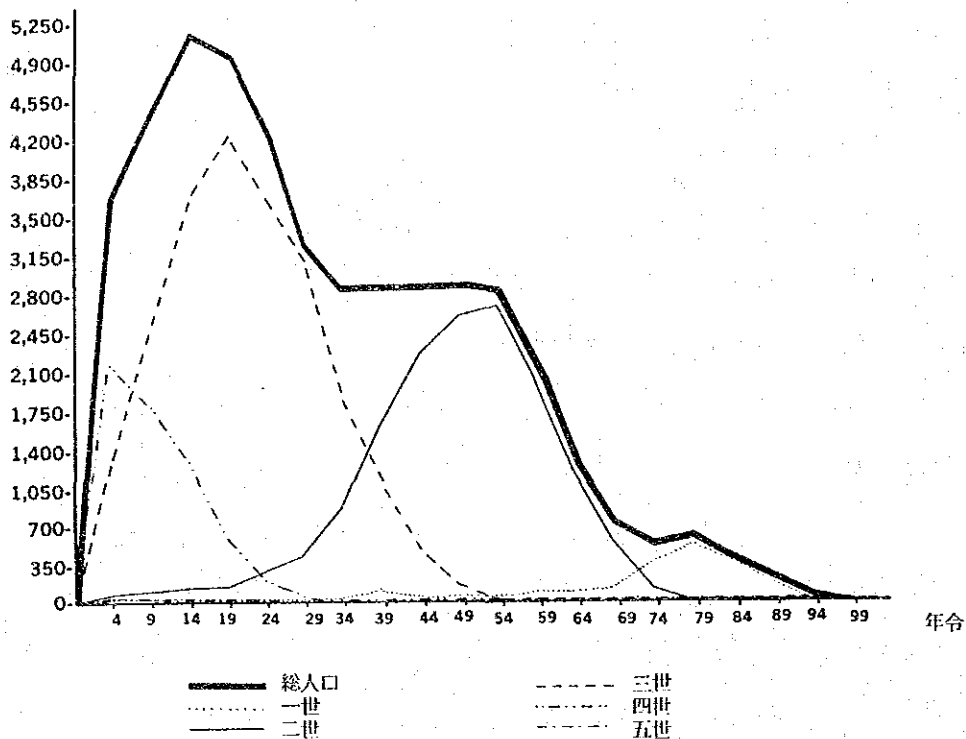
調査結果の分析にあたっては、各指標を評価し、また指標間の相関性を検討するほか、一部については1966年の実態調査結果及び1980-81年の調査結果との対比を行なう。なお本報告書で紹介する表は、一部については日系人口のみを対象としているのに対し、一部は日系人及び非日系人を対象としているものがあることは、ここに特記しておく。

### a. 人口

a.1. 年令と世代： 1989年の実態調査によれば、ペルーの日系人口は45,644に達する。これを世代別にみると、1世は2,311人で全体の5%を占め、以下、2世が15,183人(33%)、3世が21,827人(約48%)、4世が6,165人(13%)、そして5世が158人(0.34%)となっている(表1参照)。

日系人口全体にみる年令の幅は、下は0才から最高年令は99才となっている。世代別では、一世人口の年令幅が、まさにこの範囲にわたっているが、最も多い年齢範囲は68才から88才で、一世人口の66.70%を占める。二世の年令範囲は0才から84才までと、一世と同様、幅があるが、人口が集中しているのは32才から65才の範囲で、二世人口の85.88%がこの範囲に属している。また、三世人口の年令は、0才から74才までの幅があるが、1才から36才までの者が全体の94.09%を占める。4世は0才から59

《図1》 年令、世代別日系人口



才の年令範囲にあるが、0才から20才までの者が四世全体の96.51%を占める。最後に、五世の年令範囲は0才から38才までの幅があるが、0才から5才児が全体の58.85%を占め、更に0才から17才の者が全体の96.82%を占めている。

日系人の間では、年令と世代のことが日常頻繁に言及されているが、それぞれ正確な把握がなされているわけではなかった。通常、一世は年寄で、三世は若者というイメージが持たれていたが、以上の世代別年令分布結果をみると、5世代とも、例えば、0才児がいることが判明した。

しかしながら、各世代で人口が集中している年令の幅をみると、年令と世代には相関性があることがわかる。すなわち、通常言及されているように、世代が変わると年令に差があることでは一致する。要約すれば、一世の年令の幅は68才から88才に集中する一方、二世は32才から65才に、三世は1才から36才に、四世は0才から20才に、そして五世は0才から17才に、それぞれ集中している。

1966年と1989年の実態調査結果を対比すると、総体的にみた人口動態に変動があることがわかる。1966年調査時には、日系総人口の20.59%を占めていた5才以下の人口が、1989年調査時には17.60%に減少している。同様に、25才以下の人口



が、1966年には全体の52.24%を占めていたのに対し、1989年には49.09%に減っている。このような結果から結論できることは、今回の実態調査時には前回時に比べ、若年層の減少、高年齢層の増加が記録されたということである。

表1 年令、世代別日系人口 (1989年)

年令/世代	二世	三世	四世	五世	計	
0-4	4	83	1,323	2,156	79	3,645
5-9	10	118	2,456	1,764	44	4,392
10-14	5	143	3,695	1,273	25	5,141
15-19	8	158	4,204	619	7	4,996
20-24	7	298	3,672	238	1	4,216
25-29	15	436	2,737	79	1	3,268
30-34	69	858	1,848	25	0	2,800
35-39	97	1,591	1,114	4	1	2,807
40-44	69	2,234	504	2	0	2,809
45-49	70	2,587	177	1	0	2,835
50-54	68	2,664	58	2	0	2,792
55-59	96	2,009	25	1	0	2,131
60-64	104	1,202	7	0	0	1,313
65-69	133	583	2	0	0	718
70-74	353	167	1	0	0	521
75-79	538	34	0	0	0	572
80-84	390	6	0	0	0	396
85-89	199	0	0	0	0	199
90-94	55	0	0	0	0	55
95-99	16	0	0	0	0	16
99以上	0	0	0	0	0	0
無回答	5	12	4	1	0	22
計	2,311	15,183	21,827	6,165	158	45,644
%	5.06	33.26	47.82	13.51	0.51	100.00

一方、前回の実態調査時から今回の調査時まで間の出生者数は計21,574人に登り、男女別では、男50.94%に対し、女49.05%という集計結果が出た(表2参照)。そして、この間の出生者が、1989年の実態調査結果による日系総人口の47.26%を占めている。これらの者が各世代に占める比率は、一世の場合は1.38%、二世の場合は4.74%、三世の場合は67.08%、四世の場合は97.73%、そして五世の場合は98.74%となっている。同様に、1966年の実態調査実施後に出生した者のうち96.51%は、三世、四世、そして五世に属している。

図2 日系人口世代別割合比率 (%)

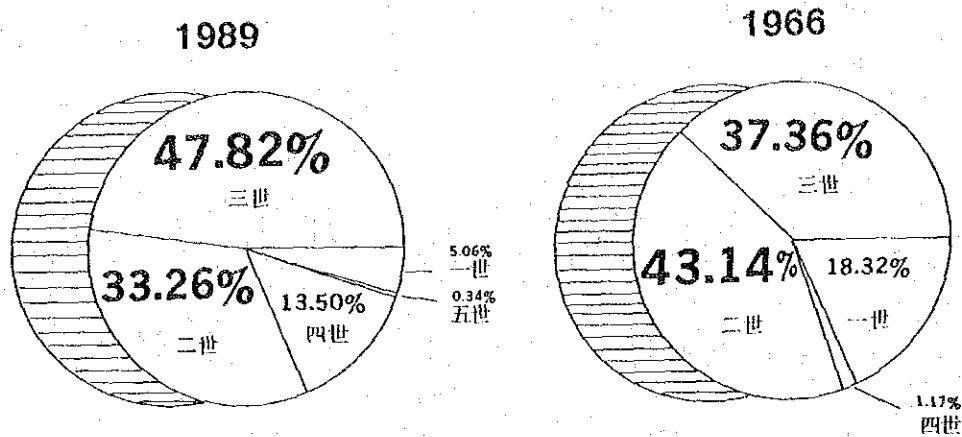


表2 1966年実態調査実施後の出生者数

世代	男	女	計
一世	18	14	32
二世	363	357	720
三世	7,433	7,208	14,641
四世	3,093	2,932	6,025
五世	84	72	156
計	10,991	10,583	21,574
%	50.95	49.05	100.00

1966年の調査時点では、世代別にみる人口集中度は、二世(43.14%)を筆頭に三世(37.36%)、一世(18.32%)、そして四世(1.17%)という順であった。これが、1989年の調査時には、三世の世代に最も集中し(47.82%)、次いで二世(33.26%)、四世(13.51%)、一世(5.06%)そして五世(0.35%)という順になっている。

1989年調査時の一世人口は、1966年に比べ3,552人減を記録しているのに対し、一世以外の世代の人口は著しい増加を記録している。最も大きな増加が記録された世代は三世で、次いで四世、二世という順となっている。5世は、1966年調査時には、まだ誕生していなかった世代である。(表3参照)

表3 世代別人口比較(1966年、1989年)

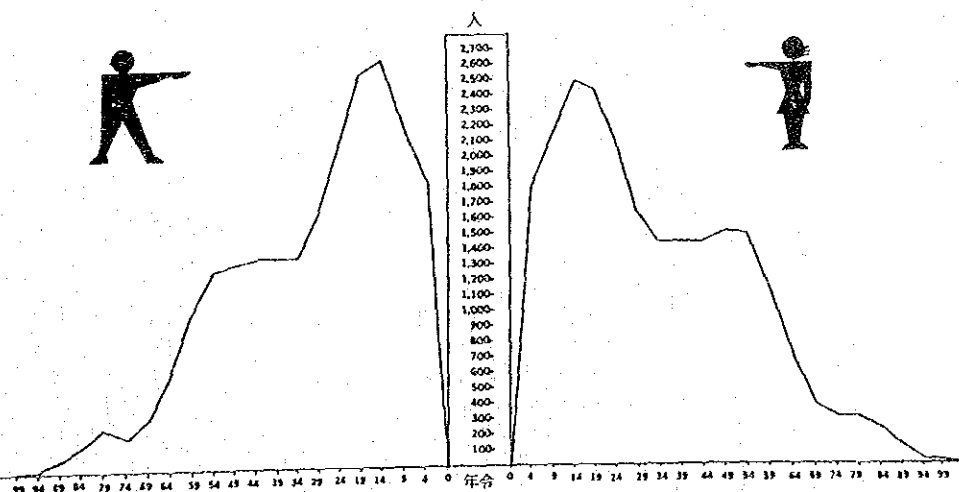
世代	1966	%	1989	%	増減
一世	5,863	18.32	2,311	5.06	- 3,552
二世	13,807	43.14	15,183	32.36	+ 1,376
三世	11,956	37.36	21,827	48.82	+ 9,871
四世	376	1.18	6,165	13.51	+ 5,789
五世	—	—	158	0.35	+ 158
計	32,002	100.00	45,644	100.00	+13,642

表4 年令・性別日系人口（1989年）

年令/性別	男	%	女	%	計	%
0-4	1,851	8.23	1,794	7.75	3,645	7.99
5-9	2,230	9.92	2,162	9.34	4,392	9.62
10-14	2,650	11.79	2,491	10.77	5,141	11.26
15-19	2,557	11.37	2,439	10.54	4,996	10.95
20-24	2,110	9.38	2,106	9.10	4,216	9.24
25-29	1,655	7.36	1,613	6.97	3,268	7.16
30-34	1,365	6.07	1,435	6.20	2,800	6.13
35-39	1,371	6.10	1,436	6.21	2,807	6.15
40-44	1,365	6.07	1,444	6.24	2,809	6.15
45-49	1,317	5.86	1,518	6.56	2,835	6.21
50-54	1,297	5.77	1,495	6.46	2,792	6.12
55-59	1,017	4.52	1,114	4.81	2,131	4.67
60-64	607	2.70	706	3.05	1,313	2.88
65-69	328	1.46	390	1.69	718	1.57
70-74	226	1.01	295	1.28	521	1.14
75-79	274	1.22	298	1.29	572	1.25
80-84	166	0.74	230	0.99	396	0.87
85-89	73	0.32	126	0.55	199	0.44
90-94	18	0.08	37	0.16	55	0.12
95-99	8	0.03	8	0.04	16	0.03
99以上 無回答	0	0.00	0	0.00	0	0.00
計	22,485	100.00	23,137	100.00	45,644	100.00
%	(49.26)		(50.69)		(99.95)	

a. 2. 年令と性： 1989年の調査結果によると、日系総人口45,644人のうち、男22,485人、女23,137人で、構成比は、それぞれ49.26%、50.69%となっている。世代別に男女人口をみると、一世は男1,028人（44.48%）、女1,278人（55.30%）、二世は男7,174人（47.25%）、女8,009人（52.75%）、三世は男11,028人（50.52%）、女10,795人（49.46%）、四世は男3,175人（51.50%）、女2,989人（48.48%）、そして五世は男86人（50.43%）、女72人（45.57%）となっている。

図3 年令・性別日系人口



総人口でみると、女の数が男のそれをわずかに上回るが、世代別にみると、この傾向は一世と二世の世代にのみ現われている傾向で、三世、四世及び五世の世代では、逆に男の数が女を上回っている。これを1966年の調査結果と比較すると(表2)、近年、男の出生数が女のそれを上回っていることがわかる(表4～表14参照)。

表5 年令・性別一世人口 (1989年)

年令/性別	男	%	女	%	計	%
0-4	1	0.10	3	0.23	4	0.17
5-9	6	0.58	4	0.31	10	0.43
10-14	4	0.39	1	0.08	5	0.22
15-19	3	0.29	5	0.39	8	0.34
20-24	6	0.58	1	0.08	7	0.30
25-29	11	1.07	4	0.31	15	0.65
30-34	28	2.72	41	3.21	69	2.99
35-39	45	4.38	52	4.07	97	4.20
40-44	30	2.52	39	3.05	69	2.99
45-49	41	3.99	29	2.27	70	3.03
50-54	38	3.70	30	2.35	68	2.94
55-59	42	4.08	54	4.22	96	4.15
60-64	39	3.79	65	5.09	104	4.50
65-69	63	6.13	70	5.48	133	5.76
70-74	149	14.49	204	15.96	353	15.27
75-79	260	25.29	278	21.75	538	23.28
80-84	163	15.86	227	17.76	390	16.88
85-89	73	7.10	126	9.86	199	8.61
90-94	18	1.75	37	2.89	55	2.38
95-99	8	0.75	8	0.62	16	0.69
99以上 無回答	0	0.00	0	0.00	0	0.00
計	1,028	100	1,278	100	2,311	100.00
%	44.48		55.38		100	

表6 年令・性別二世人口 (1989年)

年令/性別	男	%	女	%	計	%
0-4	36	0.50	47	0.59	83	0.55
5-9	56	0.78	62	0.77	118	0.78
10-14	68	0.95	75	0.94	143	0.94
15-19	93	1.30	65	0.81	158	1.04
20-24	149	2.08	149	1.86	298	1.96
25-29	196	2.73	240	3.00	436	2.87
30-34	431	6.01	427	5.33	858	5.65
35-39	751	10.47	840	10.49	1,591	10.48
40-44	1,078	15.03	1,156	14.43	2,234	14.71
45-49	1,199	16.71	1,388	17.33	2,587	17.04
50-54	1,229	17.13	1,435	17.92	2,664	17.54
55-59	960	13.38	1,049	13.10	2,009	13.03
60-64	565	7.87	637	7.95	1,202	7.92
65-69	263	3.67	320	3.99	583	3.84
70-74	77	1.07	90	1.12	167	1.10
75-79	14	0.19	20	0.25	34	0.22
80-84	3	0.04	3	0.04	6	0.04
85-89	0	0.00	0	0.00	0	0.00
90-94	0	0.00	0	0.00	0	0.00
95-99	0	0.00	0	0.00	0	0.00
99以上	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	6		6		12	0.08
計	7,174	99.99	8,009	99.99	15,183	99.99
%	47.25		52.75		100.00	

表7 年令・性別三世人口 (1989年)

年令/性別	男	%	女	%	計	%
0-4	670	6.07	653	6.05	1,323	6.06
5-9	1,253	11.36	1,203	11.14	2,456	11.25
10-14	1,889	17.36	1,806	16.73	3,695	16.93
15-19	2,148	19.48	2,056	19.04	4,204	19.26
20-24	1,821	16.51	1,851	17.15	3,672	16.82
25-29	1,402	12.71	1,335	12.37	2,737	12.54
30-34	893	8.10	955	8.84	1,848	8.47
35-39	571	5.18	543	5.03	1,114	5.10
40-44	256	2.32	248	2.30	504	2.31
45-49	77	0.70	100	0.93	177	0.81
50-54	29	0.26	29	0.27	58	0.26
55-59	14	0.13	11	0.10	25	0.11
60-64	3	0.03	4	0.04	7	0.03
65-69	2	0.02	0	0.00	2	0.01
70-74	0	0.00	1	0.01	1	0.00
75-79	0	0.00	0	0.00	0	0.00
80-84	0	0.00	0	0.00	0	0.00
85-89	0	0.00	0	0.00	0	0.00
90-94	0	0.00	0	0.00	0	0.00
95-99	0	0.00	0	0.00	0	0.00
99以上	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	—	—	—	—	4	0.02
計	11,028	100	10,795	100	21,827	99.98
%	50.52		49.46		99.98	

表8 年令・性別四世人口 (1989年)

年令/性別	男	%	女	%	計	%
0-4	1104	34.77	1052	35.19	2156	34.98
5-9	892	28.09	872	29.17	1764	28.61
10-14	673	21.20	600	20.07	1273	20.65
15-19	309	9.73	310	10.37	619	10.04
20-24	133	4.19	105	3.51	238	3.86
25-29	45	1.42	34	1.14	79	1.28
30-34	13	0.41	12	0.40	25	0.40
35-39	3	0.09	1	0.03	4	0.06
40-44	1	0.03	1	0.03	2	0.03
45-49	0	0.00	1	0.03	1	0.02
50-54	1	0.03	1	0.03	2	0.03
55-59	1	0.03	0	0.00	1	0.02
60-64	0	0.00	0	0.00	0	0.00
65-69	0	0.00	0	0.00	0	0.00
70-74	0	0.00	0	0.00	0	0.00
75-79	0	0.00	0	0.00	0	0.00
80-84	0	0.00	0	0.00	0	0.00
85-89	0	0.00	0	0.00	0	0.00
90-94	0	0.00	0	0.00	0	0.00
95-99	0	0.00	0	0.00	0	0.00
99以上	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	—	—	—	—	1	0.02
計	3175	99.99	2989	99.97	6165	100.00
%	51.50		48.48		99.98	

表9 年令・性別日系総人口 (1989年)

年令/性別	男	女	計	%
0	244	241	485	1.06
1	456	457	913	2.00
2	369	345	714	1.56
3	371	352	723	1.58
4	411	399	810	1.77
5	389	384	773	1.69
6	437	445	882	1.93
7	481	423	904	1.98
8	462	459	921	2.02
9	461	451	912	2.00
10	507	480	987	2.16
11	484	483	967	2.12
12	579	568	1,147	2.51
13	523	483	1,066	2.20
14	557	477	1,034	2.26
15	516	506	1,022	2.24
16	474	522	996	2.18
17	514	503	1,017	2.23
18	539	485	1,024	2.24
19	514	423	937	2.05
20	459	448	907	1.99
21	461	449	910	1.99
22	397	406	803	1.76
23	386	394	780	1.71
24	407	409	816	1.79
25	377	359	736	1.61
26	351	331	682	1.49
27	316	297	613	1.34

(つづく)

(表9つづき)

年齢／性別	男	女	計	％
28	332	324	656	1.44
29	279	302	581	1.27
30	300	321	621	1.36
31	246	263	509	1.11
32	290	297	587	1.29
33	257	254	511	1.12
34	272	300	572	1.25
35	301	277	578	1.27
36	274	308	582	1.27
37	243	255	498	1.09
38	301	312	613	1.34
39	252	284	536	1.17
40	284	343	627	1.37
41	242	243	485	1.06
42	309	313	622	1.36
43	268	272	540	1.18
44	262	273	535	1.17
45	260	283	543	1.19
46	252	297	549	1.20
47	230	264	494	1.08
48	279	359	638	1.40
49	296	315	611	1.34
50	310	348	658	1.44
51	240	273	513	1.12
52	293	344	637	1.39
53	234	259	493	1.08
54	220	271	491	1.07
55	237	227	464	1.02
56	187	240	427	0.93
57	200	204	404	0.88
58	225	243	468	1.02
59	168	200	368	0.81
60	172	223	395	0.86
61	132	131	263	0.58
62	135	143	278	0.61
63	85	112	197	0.43
64	83	97	180	0.39
65	88	103	191	0.42
66	61	80	141	0.31
67	49	72	121	0.26
68	77	81	158	0.35
69	53	54	107	0.23
70	60	62	122	0.27
71	40	52	92	0.20
72	44	55	99	0.22
73	41	67	108	0.24
74	41	59	100	0.22
75	57	69	126	0.28
76	61	55	116	0.25
77	57	43	100	0.22
78	60	68	128	0.28
79	39	63	102	0.22
80	58	57	115	0.25
81	34	49	83	0.18
82	26	48	74	0.16
83	18	42	60	0.13
84	30	34	64	0.14
85	17	45	62	0.13
86	11	26	37	0.08
87	17	24	41	0.09
88	21	22	43	0.09
89	7	9	16	0.03
90	6	11	17	0.04
91	5	8	13	0.03

(つづく)

(表りつづき)

年齢/性別	男	女	計	%
92	3	6	9	0.02
93	3	6	9	0.02
94	1	6	7	0.01
95	3	3	6	0.01
96	2	2	4	0.01
97	0	2	2	0.00
98	2	0	2	0.00
99	1	1	2	0.00
100	0	0	0	0.00
	22485	23137	45,622	99.83
S/I		22	22	0.05
計			45,644	99.88

表10 年齢・性別一世人口 (1989年)

年齢/性別	男	女	計	%
0	1	1	2	0.09
1	0	1	1	0.04
2	0	0	0	0.00
3	0	1	1	0.04
4	0	0	0	0.00
5	1	1	2	0.09
6	1	0	1	0.04
7	2	1	3	0.13
8	1	2	3	0.13
9	1	0	1	0.04
10	0	0	0	0.00
11	1	1	2	0.09
12	1	0	1	0.04
13	0	0	0	0.00
14	2	0	2	0.09
15	0	1	1	0.04
16	1	0	1	0.04
17	1	2	3	0.13
18	1	0	1	0.04
19	0	2	2	0.09
20	3	1	4	0.17
21	0	0	0	0.00
22	1	0	1	0.04
23	0	0	0	0.00
24	2	0	2	0.09
25	0	0	0	0.00
26	2	1	3	0.13
27	5	0	5	0.22
28	2	0	2	0.09
29	2	3	5	0.22
30	2	6	8	0.35
31	4	9	13	0.56
32	7	5	12	0.52
33	6	11	17	0.73
34	9	10	19	0.82
35	11	11	22	0.95
36	8	7	15	0.65
37	9	11	20	0.86
38	9	14	23	0.99
39	8	9	17	0.73
40	6	13	19	0.82
41	6	8	14	0.60
42	5	6	11	0.47

(つづく)



(表10つづき)

年齢/性別	男	女	計	%
43	4	8	12	0.52
44	9	4	13	0.56
45	9	5	14	0.60
46	12	8	20	0.86
47	4	5	9	0.39
48	5	4	9	0.39
49	11	7	18	0.78
50	8	5	13	0.56
51	6	5	11	0.47
52	12	7	19	0.82
53	9	7	16	0.69
54	3	6	9	0.39
55	11	8	19	0.82
56	6	11	17	0.73
57	7	11	18	0.78
58	12	11	23	0.99
59	6	13	19	0.82
60	2	16	18	0.78
61	14	16	30	1.30
62	9	10	19	0.82
63	4	14	18	0.78
64	10	9	19	0.82
65	11	7	18	0.78
66	7	13	20	0.86
67	8	9	17	0.73
68	21	21	42	1.82
69	16	20	36	1.56
70	26	28	54	2.34
71	24	31	55	2.38
72	34	43	77	3.33
73	29	51	80	3.46
74	36	51	87	3.76
75	52	62	114	4.93
76	55	51	106	4.59
77	56	42	98	4.24
78	58	63	121	5.23
79	39	60	99	4.28
80	56	57	113	4.89
81	34	49	83	3.59
82	26	46	72	3.11
83	18	41	59	2.55
84	29	34	63	2.73
85	17	45	62	2.68
86	11	26	37	1.60
87	17	24	41	1.77
88	21	22	43	1.86
89	7	9	16	0.69
90	6	11	17	0.73
91	5	8	13	0.56
92	3	6	9	0.39
93	3	6	9	0.39
94	1	6	7	0.30
95	3	3	6	0.26
96	2	2	4	0.17
97	0	2	2	0.09
98	2	0	2	0.09
99	1	1	2	0.09
100	0	0	0	0.00
	1,028	1,278	2,306	99.67
S/I		5	5	0.22
計			2,311	99.89

表 1.1 年令・性別二世人口 (1989年)

年令/性別	男	女	計	%
0	6	9	15	0.10
1	9	12	21	0.14
2	5	9	14	0.09
3	9	7	16	0.10
4	7	10	17	0.11
5	12	11	23	0.15
6	12	23	35	0.23
7	7	11	18	0.12
8	13	10	23	0.15
9	12	7	19	0.12
10	10	10	20	0.13
11	15	15	30	0.20
12	17	19	36	0.24
13	17	17	34	0.22
14	9	14	23	0.15
15	17	18	35	0.23
16	14	13	27	0.18
17	19	15	34	0.22
18	18	9	27	0.18
19	25	10	35	0.23
20	21	24	45	0.30
21	30	21	51	0.33
22	31	21	52	0.34
23	28	42	70	0.46
24	39	41	80	0.53
25	31	36	67	0.44
26	46	45	91	0.60
27	31	40	71	0.47
28	53	58	111	0.73
29	35	61	96	0.63
30	67	78	145	0.95
31	61	71	132	0.87
32	93	86	179	1.18
33	86	79	165	1.09
34	124	113	237	1.56
35	137	144	281	1.85
36	117	165	282	1.86
37	136	141	277	1.82
38	186	181	367	2.42
39	175	209	384	2.53
40	214	255	469	3.09
41	178	189	367	2.42
42	244	250	494	3.25
43	224	223	447	2.94
44	218	239	457	3.01
45	232	251	483	3.18
46	218	254	472	3.11
47	214	247	461	3.04
48	259	343	602	3.96
49	276	293	569	3.75
50	290	331	621	4.09
51	229	264	493	3.25
52	273	326	599	3.94
53	224	250	474	3.12
54	213	264	477	3.14
55	221	216	437	2.88
56	178	224	402	2.65
57	191	192	383	2.52
58	212	231	443	2.92
59	158	186	344	2.26
60	169	206	375	2.47
61	118	113	231	1.52

(つづく)

(表11つづき)

年齢/性別	男	女	計	%
62	124	132	256	1.69
63	81	98	179	1.18
64	73	88	161	1.06
65	75	96	171	1.13
66	54	67	121	0.80
67	41	63	104	0.68
68	56	60	116	0.76
69	37	34	71	0.47
70	34	34	68	0.54
71	16	21	37	0.24
72	10	12	22	0.14
73	12	16	28	0.18
74	5	7	12	0.08
75	5	7	12	0.08
76	6	4	10	0.06
77	1	1	2	0.01
78	2	5	7	0.05
79	0	3	3	0.02
80	2	0	2	0.01
81	0	0	0	0.00
82	0	2	2	0.01
83	0	1	1	0.01
84	1	0	1	0.01
85	0	0	0	0.00
86	0	0	0	0.00
87	0	0	0	0.00
88	0	0	0	0.00
89	0	0	0	0.00
90	0	0	0	0.00
91	0	0	0	0.00
92	0	0	0	0.00
93	0	0	0	0.00
94	0	0	0	0.00
95	0	0	0	0.00
96	0	0	0	0.00
97	0	0	0	0.00
98	0	0	0	0.00
99	0	0	0	0.00
100	0	0	0	0.00
	7,168	8,003	15,171	99.88
S/I		12	12	0.08
計			15,183	99.96

表12 年齢・性別三世人口 (1989年)

年齢/性別	男	女	計	%
0	83	73	156	0.71
1	147	138	285	1.30
2	120	118	238	1.09
3	137	139	276	1.26
4	183	185	368	1.68
5	182	183	365	1.67
6	227	228	455	2.08
7	274	230	504	2.31
8	277	262	539	2.47
9	293	300	593	2.72
10	323	322	645	2.95
11	328	334	662	3.03
12	424	416	840	3.85
13	374	374	748	3.43
14	440	360	800	3.66

(つづく)

(表12つづき)

年齢/性別	男	女	計	%
15	413	398	811	3.71
16	393	431	824	3.77
17	424	431	855	3.92
18	478	429	907	4.15
19	440	367	807	3.70
20	396	388	784	3.59
21	396	398	794	3.64
22	344	371	715	3.27
23	337	333	670	3.07
24	348	361	709	3.25
25	327	315	642	3.94
26	294	281	575	2.63
27	269	248	517	2.37
28	274	259	533	2.41
29	238	232	470	2.15
30	228	231	459	2.10
31	178	181	359	1.64
32	188	205	393	1.80
33	163	163	326	1.49
34	136	175	311	1.42
35	152	122	274	1.25
36	147	135	282	1.29
37	98	103	201	0.92
38	105	117	222	1.02
39	69	66	135	0.62
40	64	74	138	0.63
41	58	46	104	0.48
42	59	57	116	0.53
43	40	41	81	0.37
44	35	30	65	0.30
45	19	27	46	0.21
46	22	34	56	0.26
47	12	12	24	0.11
48	15	12	27	0.12
49	9	15	24	0.11
50	12	12	24	0.11
51	4	4	8	0.04
52	8	11	19	0.09
53	1	1	2	0.01
54	4	1	5	0.02
55	5	3	8	0.04
56	3	5	8	0.04
57	2	1	3	0.01
58	1	1	2	0.01
59	3	1	4	0.02
60	1	1	2	0.01
61	0	2	2	0.01
62	2	1	3	0.01
63	0	0	0	0.00
64	0	0	0	0.00
65	2	0	2	0.01
66	0	0	0	0.00
67	0	0	0	0.00
68	0	0	0	0.00
69	0	0	0	0.00
70	0	0	0	0.00
71	0	0	0	0.00
72	0	0	0	0.00
73	0	0	0	0.00
74	0	1	1	0.01
75	0	0	0	0.00
76	0	0	0	0.00
77	0	0	0	0.00
78	0	0	0	0.00
79	0	0	0	0.00

(つづく)

(表12つづき)

年令/性別	男	女	計	%
80	0	0	0	0.00
81	0	0	0	0.00
82	0	0	0	0.00
83	0	0	0	0.00
84	0	0	0	0.00
85	0	0	0	0.00
86	0	0	0	0.00
87	0	0	0	0.00
88	0	0	0	0.00
89	0	0	0	0.00
90	0	0	0	0.00
91	0	0	0	0.00
92	0	0	0	0.00
93	0	0	0	0.00
94	0	0	0	0.00
95	0	0	0	0.00
96	0	0	0	0.00
97	0	0	0	0.00
98	0	0	0	0.00
99	0	0	0	0.00
100	0	0	0	0.00
	11,028	10,795	21,823	99.91
SA		4	4	0.02
計			21,827	99.93

表13 年令・性別四世人口 (1989年)

年令/性別	男	女	計	%
0	148	152	300	11.87
1	290	297	587	9.52
2	235	207	442	7.17
3	219	199	418	6.78
4	212	197	409	6.63
5	187	182	369	5.98
6	192	192	384	6.23
7	196	179	375	6.08
8	166	181	347	5.63
9	151	138	289	4.69
10	171	144	315	5.11
11	138	132	270	4.38
12	134	131	265	4.30
13	128	90	218	3.54
14	102	103	205	3.32
15	85	89	174	2.82
16	66	77	143	2.32
17	68	54	122	1.98
18	42	46	88	1.43
19	48	44	92	1.49
20	39	35	74	1.20
21	34	30	64	1.04
22	21	14	35	0.57
23	21	19	40	0.65
24	18	7	25	0.40
25	18	8	26	0.42
26	9	4	13	0.21
27	11	9	20	0.32
28	3	7	10	0.16
29	4	6	10	0.16
30	3	6	9	0.14
31	3	2	5	0.08

(つづ)

(表13つづき)

年齢/性別	男	女	計	%
32	2	1	3	0.05
33	2	1	3	0.05
34	3	2	5	0.08
35	1	0	1	0.01
36	2	1	3	0.05
37	0	0	0	0.00
38	0	0	0	0.00
39	0	0	0	0.00
40	0	1	1	0.01
41	0	0	0	0.00
42	1	0	1	0.01
43	0	0	0	0.00
44	0	0	0	0.00
45	0	0	0	0.00
46	0	1	1	0.01
47	0	0	0	0.00
48	0	0	0	0.00
49	0	0	0	0.00
50	0	0	0	0.00
51	1	0	1	0.01
52	0	0	0	0.00
53	0	1	1	0.01
54	0	0	0	0.00
55	0	0	0	0.00
56	0	0	0	0.00
57	0	0	0	0.00
58	0	0	0	0.00
59	1	0	1	0.01
60	0	0	0	0.00
61	0	0	0	0.00
62	0	0	0	0.00
63	0	0	0	0.00
64	0	0	0	0.00
65	0	0	0	0.00
66	0	0	0	0.00
67	0	0	0	0.00
68	0	0	0	0.00
69	0	0	0	0.00
70	0	0	0	0.00
71	0	0	0	0.00
72	0	0	0	0.00
73	0	0	0	0.00
74	0	0	0	0.00
75	0	0	0	0.00
76	0	0	0	0.00
77	0	0	0	0.00
78	0	0	0	0.00
79	0	0	0	0.00
80	0	0	0	0.00
81	0	0	0	0.00
82	0	0	0	0.00
83	0	0	0	0.00
84	0	0	0	0.00
85	0	0	0	0.00
86	0	0	0	0.00
87	0	0	0	0.00
88	0	0	0	0.00
89	0	0	0	0.00
90	0	0	0	0.00
91	0	0	0	0.00
92	0	0	0	0.00
93	0	0	0	0.00
94	0	0	0	0.00
95	0	0	0	0.00
96	0	0	0	0.00

(つづ)

(表13つづき)

年齢/性別	男	女	計	%
97	0	0	0	0.00
98	0	0	0	0.00
99	0	0	0	0.00
100	0	0	0	0.00
S/I	3,175	2,989	6,164	99.92
		1	1	0.01
計			6,165	99.93

表14 年齢・性別五世人口 (1989年)

年齢/性別	男	女	計	%
0	6	6	12	7.59
1	10	9	19	12.02
2	9	11	20	12.66
3	6	6	12	7.59
4	9	7	16	10.13
5	7	7	14	8.86
6	5	2	7	4.43
7	2	2	4	2.53
8	5	4	9	5.70
9	4	6	10	6.33
10	3	4	7	4.43
11	2	1	3	1.90
12	3	2	5	3.16
13	4	2	6	3.80
14	4	0	4	2.53
15	1	0	1	0.63
16	0	1	1	0.63
17	2	1	3	1.90
18	0	1	1	0.63
19	1	0	1	0.63
20	0	0	0	0.00
21	1	0	1	0.63
22	0	0	0	0.00
23	0	0	0	0.00
24	0	0	0	0.00
25	1	0	1	0.63
26	0	0	0	0.00
27	0	0	0	0.00
28	0	0	0	0.00
29	0	0	0	0.00
30	0	0	0	0.00
31	0	0	0	0.00
32	0	0	0	0.00
33	0	0	0	0.00
34	0	0	0	0.00
35	0	0	0	0.00
36	0	0	0	0.00
37	0	0	0	0.00
38	1	0	1	0.63
39	0	0	0	0.00
40	0	0	0	0.00
41	0	0	0	0.00
42	0	0	0	0.00
43	0	0	0	0.00
44	0	0	0	0.00
45	0	0	0	0.00
46	0	0	0	0.00
47	0	0	0	0.00
48	0	0	0	0.00
49	0	0	0	0.00

(つづ)





a. 3. 既婚・未婚等ステータスと年令及び世代： 15～19才の年令層は、通常、既婚のケースもでてくるので（表16参照）、この年令範囲から上の年令につき、既婚・未婚等ステータスの統計を出したところ、既婚者15,020人（15才以上の人口の46.26%）、未婚者14,418人（同44.40%）で、既婚者の数が最も多いという集計結果が出た。

また、この15才以上の人口のうち、配偶者と死別した者の数は3番目に多く、2,058人（同6.34%）となっている。別居中の者、同棲中の者及び離婚者の数は、それぞれ、452人（同1.33%）、309人（同0.95%）、207人（同0.64%）となっている。これらの3ケースの合計は、15才以上の人口の2.92%を占め、数的には少ないが、これらのケースが記録されているということは、超保守的といわれている日系社会の風潮変化を物語っている点で特記すべきことである。

同様に、既婚者と同棲中のケースは15～19才の年令層から記録されており、配偶者と死別した者、別居中の者及び離婚者は20～24才の年齢層から記録されている。また、未婚者はこの20～24才の年齢層から数的に減少している。

既婚者が最も多い年齢層は25～29才の層で、また未婚者については35才以下に最も多い。他方、配偶者と死別した者は45才から89才の年齢範囲に集中している。

35才から64才の年齢範囲に未婚者が多く記録されていることも指摘しておく必要がある。これはリマ市内居住者に多く記録されており、一世帯に複数の成人独身者がいるケースも多かった。35才から64才の年齢範囲の独身者数は、全体で2,574人に達し、このうち、83.60%にあたる2,152人は2世の世代に属し、男女の別では、男993人、女性1,161人となっている。三世の場合は、15.15%にあたる390人が独身で、男女の別では、男200人、女190人が独身である。一方、一世については、この数はずっと少なく、男性独身者13人、女性独身者15人の計28人で、わずか1.08%を占めるにすぎない。

集約すると、35才から64才までの年齢範囲には、かなりの数の未婚者がおり、その大半がリマ市内に居住する二世の世代であることが判った。なお、地方都市については、この傾向は異なり（表16～32参照）、むしろ混血化が多いことが判明した。これについては、先にいって扱うことにする。

表16 ステータスと年齢別日系人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同棲者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	3,645	0	0	0	0	0	—	3,645
5-9	4,392	0	0	0	0	0	—	4,392
10-14	5,141	0	0	0	0	0	—	5,141
15-19	4,959	28	9	0	0	0	—	4,996
20-24	3,747	416	36	1	3	13	—	4,216
25-29	2,056	1,103	38	9	13	49	—	3,268
30-34	1,028	1,639	51	13	21	48	—	2,800
35-39	732	1,936	38	22	29	50	—	2,807
40-44	581	2,054	28	52	32	62	—	2,809
45-49	481	2,119	28	116	34	57	—	2,835
50-54	417	2,049	27	197	31	71	—	2,792
55-59	251	1,529	23	260	28	40	—	2,131
60-64	112	883	12	270	11	25	—	1,313
65-69	34	462	9	201	3	9	—	718
70-74	7	303	7	201	1	2	—	521
75-79	6	284	1	276	0	5	—	572
80-84	5	146	1	242	1	1	—	396
85-89	1	54	1	143	0	0	—	199
90-94	1	11	0	43	0	0	—	55
95-99	0	4	0	12	0	0	—	16
99以上	0	0	0	0	0	0	—	0
無回答	—	—	—	—	—	—	22	22
計	27,596	15,020	309	2,058	207	432	22	45,644
%	60.45%	32.90%	0.67%	4.50%	0.45%	0.94%	0.04%	99.95%
	(44.40)	(46.26)	(0.95)	(6.34)	(0.64)	(1.33)		

表17 ステータスと年齢別一世人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同棲者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	4	0	0	0	0	0	5	9
5-9	10	0	0	0	0	0	0	10
10-14	5	0	0	0	0	0	0	5
15-19	8	0	0	0	0	0	0	8
20-24	7	0	0	0	0	0	0	7
25-29	8	7	0	0	0	0	0	15
30-34	14	54	0	1	0	0	0	69
35-39	18	74	2	1	0	2	0	97
40-44	1	62	0	3	0	3	0	69
45-49	0	67	0	2	0	1	0	70
50-54	2	61	1	2	2	0	0	68
55-59	3	79	1	11	1	1	0	96
60-64	4	74	1	23	1	1	0	104
65-69	0	90	1	41	0	1	0	133
70-74	3	209	3	138	0	0	0	353
75-79	5	267	1	261	0	4	0	538
80-84	3	144	0	241	1	1	0	390
85-89	1	54	1	143	0	0	0	199
90-94	1	11	0	43	0	0	0	55
95-99	0	4	0	12	0	0	0	16
99以上	0	0	0	0	0	0	0	0
無回答	—	—	—	—	—	—	—	—
計	97	1,257	11	922	5	14	5	2,311
%	4.19	54.38	0.46	39.88	0.21	0.59	0.21	99.92

表18 ステータスと年齢別二世人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同居者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	83	0	0	0	0	0	—	83
5-9	118	0	0	0	0	0	—	118
10-14	143	0	0	0	0	0	—	143
15-19	157	1	0	0	0	0	—	158
20-24	263	31	1	1	1	1	—	298
25-29	261	162	1	2	3	7	—	436
30-34	315	505	7	7	8	16	—	858
35-39	445	1,075	18	14	17	22	—	1,591
40-44	484	1,621	18	43	26	42	—	2,234
45-49	464	1,909	27	104	30	53	—	2,587
50-54	407	1,945	25	188	29	70	—	2,664
55-59	246	1,432	22	244	26	39	—	2,009
60-64	108	803	10	247	10	24	—	1,202
65-69	33	372	7	160	3	8	—	583
70-74	4	94	4	62	1	2	—	167
75-79	1	17	0	15	0	1	—	34
80-84	2	2	1	1	0	0	—	6
85-89	0	0	0	0	0	0	—	0
90-94	0	0	0	0	0	0	—	0
95-99	0	0	0	0	0	0	—	0
99以上	0	0	0	0	0	0	—	0
無回答							12	12
計	3,534	9,969	141	1,088	154	285	12	15,183
%	23.27	65.65	0.92	7.16	1.01	1.87	0.07	99.95

表19 ステータスと年齢別三世人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同居者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	1,323	0	0	0	0	0	—	1,323
5-9	2,456	0	0	0	0	0	—	2,456
10-14	3,695	0	0	0	0	0	—	3,695
15-19	4,171	26	7	0	0	0	—	4,204
20-24	3,264	364	30	0	2	12	—	3,672
25-29	1,742	906	33	7	10	39	—	2,737
30-34	694	1,066	39	5	13	31	—	1,848
35-39	268	783	18	7	12	26	—	1,114
40-44	96	369	10	6	6	17	—	504
45-49	17	142	1	10	4	3	—	177
50-54	7	43	1	6	0	1	—	58
55-59	2	17	0	5	1	0	—	25
60-64	0	6	1	0	0	0	—	7
65-69	1	0	1	0	0	0	—	2
70-74	0	0	0	1	0	0	—	1
75-79	0	0	0	0	0	0	—	0
80-84	0	0	0	0	0	0	—	0
85-89	0	0	0	0	0	0	—	0
90-94	0	0	0	0	0	0	—	0
99以上	0	0	0	0	0	0	—	0
無回答	0	0	0	0	0	0	4	4
計	17,736	3,722	141	47	48	129	4	21,827
%	81.26	17.05	0.64	0.21	0.22	0.59	0.02	99.99

表 2 0 ステータスと年齢別四世人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同居者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	2,156	0	0	0	0	0	—	2,156
5-9	1,764	0	0	0	0	0	—	1,764
10-14	1,273	0	0	0	0	0	—	1,273
15-19	616	1	2	0	0	0	—	619
20-24	212	21	5	0	0	0	—	238
25-29	44	28	4	0	0	3	—	79
30-34	5	14	5	0	0	1	—	25
35-39	1	3	0	0	0	0	—	4
40-44	0	2	0	0	0	0	—	2
45-49	0	1	0	0	0	0	—	1
50-54	1	0	0	1	0	0	—	2
55-59	0	1	0	0	0	0	—	1
60-64	0	0	0	0	0	0	—	0
65-69	0	0	0	0	0	0	—	0
70-74	0	0	0	0	0	0	—	0
75-79	0	0	0	0	0	0	—	0
80-84	0	0	0	0	0	0	—	0
85-89	0	0	0	0	0	0	—	0
90-94	0	0	0	0	0	0	—	0
95-99	0	0	0	0	0	0	—	0
99以上	0	0	0	0	0	0	—	0
無回答							1	1
計	6,072	71	16	1	0	4	1	6,165
%	98.49	1.15	0.25	0.01	0.00	0.06	0.01	99.97

表 2 1 ステータスと年齢別五世人口 (1989年)

年齢/ステータス	未婚	既婚	同居者	死別	離婚者	別居中	無回答	計
0-4	79	0	0	0	0	0	—	79
5-9	44	0	0	0	0	0	—	44
10-14	25	0	0	0	0	0	—	25
15-19	7	0	0	0	0	0	—	7
20-24	1	0	0	0	0	0	—	1
25-29	1	0	0	0	0	0	—	1
30-34	0	0	0	0	0	0	—	0
35-39	0	1	0	0	0	0	—	1
40-44	0	0	0	0	0	0	—	0
45-49	0	0	0	0	0	0	—	0
50-54	0	0	0	0	0	0	—	0
55-59	0	0	0	0	0	0	—	0
60-64	0	0	0	0	0	0	—	0
65-69	0	0	0	0	0	0	—	0
70-74	0	0	0	0	0	0	—	0
75-79	0	0	0	0	0	0	—	0
80-84	0	0	0	0	0	0	—	0
85-89	0	0	0	0	0	0	—	0
90-94	0	0	0	0	0	0	—	0
99以上	0	0	0	0	0	0	—	0
無回答	0	0	0	0	0	0	—	0
計	157	1	0	0	0	0	—	158
%	99.37	0.63	0.00	0.00	0.00	0.00	—	100.00

表 2 2 ステータスと性別日系人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	14,215	13,381	27,596	60.46
既婚	7,588	7,432	15,020	32.91
同棲中	177	132	309	0.68
死別	306	1,752	2,058	4.51
離婚	61	146	207	0.45
別居中	138	294	432	0.95
無回答			22	0.04
計	22,485	23,137	45,644	100.00

表 2 3 ステータスと性別一世人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	59	38	97	4.20
既婚	790	467	1,257	54.39
同棲中	8	3	11	0.48
死別	162	760	922	39.90
離婚	1	4	5	0.21
別居中	8	6	14	0.61
無回答			5	0.21
計	1,028	1,278	2,311	100.00

表 2 4 ステータスと性別二世人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	1,716	1,818	3,534	23.28
既婚	5,106	4,863	9,969	65.66
同棲中	82	59	141	0.93
死別	139	949	1,088	7.17
離婚	43	111	154	1.01
別居中	82	203	285	1.87
無回答	6	6	12	0.08
計	7,174	8,009	15,183	100.00

表 2 5 ステータスと性別三世人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	9,217	8,519	17,736	81.26
既婚	1,662	2,060	3,722	17.05
同棲中	80	61	141	0.65
死別	5	42	47	0.21
離婚	17	31	48	0.22
別居中	47	82	129	0.59
無回答	—	—	4	0.02
計	11,028	10,795	21,827	100.00

表26 ステータスと性別四世人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	3,138	2,934	6,072	98.49
既婚	29	42	71	1.15
同棲中	7	9	16	0.26
死別	0	1	1	0.02
離婚	0	0	0	0.00
別居中	1	3	4	0.06
無回答			1	0.02
計	3,175	2,989	6,165	100.00

表27 ステータスと性別五世人口 (1989年)

ステータス/性別	男	女	計	%
未婚	85	72	157	99.37
既婚	1	0	1	0.63
同棲中	0	0	0	0.00
死別	0	0	0	0.00
離婚	0	0	0	0.00
別居中	0	0	0	0.00
無回答	0	0	0	0.00
計	86	72	158	100.00

表28 年令ステータス性別一世人口 (1989年)

ステータス 年令/性別	独身		既婚		同棲中		死別		離婚		別居中		無回答	合計 年令	% 対年令
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0-4	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	9	0.38
5-9	6	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0.43
10-14	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.21
15-19	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.34
20-24	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0.30
25-29	8	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0.64
30-34	5	9	23	31	0	0	0	1	0	0	0	0	0	69	2.98
35-39	9	9	35	39	0	2	0	1	0	0	1	1	0	97	4.19
40-44	1	0	28	34	0	0	1	2	0	0	0	3	0	69	2.98
45-49	0	0	40	27	0	0	0	2	0	0	1	0	0	70	3.02
50-54	0	2	37	24	1	0	0	2	0	2	0	0	0	68	2.94
55-59	2	1	38	41	1	0	1	10	0	1	1	0	0	96	4.15
60-64	1	3	34	40	0	1	3	20	0	1	1	0	0	104	4.50
65-69	0	0	56	34	1	0	5	36	0	0	1	0	0	133	5.75
70-74	3	0	125	84	3	0	18	120	0	0	0	0	0	353	15.27
75-79	5	0	203	64	1	0	48	213	0	0	3	1	0	538	23.37
80-84	3	0	114	30	0	0	44	197	1	0	1	0	0	390	16.87
85-89	1	0	41	13	1	0	30	113	0	0	0	0	0	199	8.61
90-94	1	0	9	2	0	0	8	35	0	0	0	0	0	55	2.37
95-99	0	0	4	0	0	0	4	8	0	0	0	0	0	16	0.69
100-104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
105-109	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
計	59	38	790	467	8	3	162	760	1	4	8	6	5	2,311	99.89
ステータス比(%)	2.55	1.64	34.18	20.20	0.34	0.12	7.00	32.88	0.04	0.17	0.34	0.25	0.21		99.92

二世人口

総数	: 51,593	(総数に占める割合	: 29.42%)
二世人口	: 29,311	(二世人口に占める割合	: 47.21%)
男性数	: 7,174	(二世人口に占める割合	: 52.71%)
女性数	: 8,009	(二世人口に占める割合	: 0.07%)
無回答	:		

表29 年令ステータス性別二世人口 (1989年) ステータス

ステータス 年令/性別	独身		既婚		同棲中		死別		離婚		別居中		無回答	合計 年令	対年令 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0-4	36	47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0.95	0.62
5-9	56	62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	118	0.77
10-14	68	75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	143	0.94
15-19	93	64	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	158	1.04
20-24	138	125	10	21	1	0	0	1	0	1	0	1	0	298	1.96
25-29	132	129	57	105	1	0	1	1	1	2	4	3	0	436	2.87
30-34	182	133	233	272	3	4	4	3	4	4	5	11	0	858	5.65
35-39	224	221	509	566	8	10	1	13	6	11	3	19	0	1,591	10.47
40-44	235	249	810	811	11	7	7	36	6	20	9	33	0	2,234	14.71
45-49	199	265	943	966	15	12	17	87	13	17	12	41	0	2,587	17.03
50-54	182	225	981	964	13	12	30	158	3	26	20	50	0	2,664	17.54
55-59	98	148	800	632	12	10	31	213	5	21	14	25	0	2,009	13.23
60-64	55	53	464	339	9	1	23	224	4	6	10	14	0	1,202	7.91
65-69	15	18	219	153	6	1	18	142	1	2	4	4	0	583	3.83
70-74	3	1	66	28	2	2	6	56	0	1	0	2	0	167	1.09
75-79	0	1	12	5	0	0	1	14	0	0	1	0	0	34	0.22
80-84	0	2	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	6	0.03
85-89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
90-94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
100-104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
105-109	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
計	1,716	1,818	5,106	4,863	82	59	139	949	43	111	82	203	12	15,183	99.91
ステータス比(%)	11.30	11.97	33.62	32.02	0.54	0.38	0.91	6.25	0.28	0.73	0.54	1.33	0.07		99.94

二世人口

総数 :	51,593	(総数に占める割合 :	29.42%)
二世人口 :	29,311	(二世人口に占める割合 :	47.21%)
男性数 :	7,174	(二世人口に占める割合 :	52.71%)
女性数 :	8,009	(二世人口に占める割合 :	0.07%)
無回答 :			

表30 年令ステータス性別三世人口 (1989年) ステータス

ステータス 年令/性別	独身		既婚		同棲中		死別		離婚		別居中		無回答	合計 年令	対年令 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0-4	670	653	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1,327	6.07
5-9	1,253	1,203	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,456	11.25
10-14	1,889	1,806	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,695	16.92
15-19	2,139	2,032	7	19	2	5	0	0	0	0	0	0	0	4,204	19.26
20-24	1,690	1,574	114	250	16	14	0	6	0	2	1	11	0	3,672	16.82
25-29	996	746	366	540	16	17	1	6	0	8	21	18	0	2,737	12.53
30-34	379	315	474	592	28	11	0	5	6	7	6	25	0	1,848	8.46
35-39	141	127	408	375	10	8	0	7	3	4	8	9	0	1,114	5.10
40-44	48	48	190	179	6	4	0	6	4	2	8	9	0	504	2.30
45-49	8	9	65	77	0	1	1	9	2	2	1	2	0	177	0.80
50-54	2	5	23	20	1	0	2	4	0	0	1	0	0	58	0.26
55-59	1	1	12	5	0	0	1	4	0	1	0	0	0	25	0.11
60-64	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0.03
65-69	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.009
70-74	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.004
75-79	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
80-84	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
85-89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
90-94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
100-104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
105-109	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
計	9,217	8,519	1,662	2,060	80	61	5	42	17	31	47	82	4	21,827	99.92
ステータス比(%)	42.22	39.02	7.61	9.43	0.36	0.27	0.02	0.19	0.07	0.14	0.21	0.37	0.01		99.92

三世人口

総数 :	51,593	(総数に占める割合 :	42.30%)
三世人口 :	21,827	(三世人口に占める割合 :	50.52%)
男性数 :	11,028	(三世人口に占める割合 :	49.45%)
女性数 :	10,795	(三世人口に占める割合 :	0.01%)
無回答 :	4		

表31 年令ステータス性別四世人口 (1989年) ステータス

ステータス 年令/性別	独身		既婚		同棲中		死別		離婚		別居中		無回答	合計 年令	対年令 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0-4	1,104	1,052	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,156	34.97
5-9	892	872	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,764	28.61
10-14	673	600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,273	20.64
15-19	309	307	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	619	10.04
20-24	121	91	9	12	3	2	0	0	0	0	0	0	0	238	3.86
25-29	33	11	10	18	2	2	0	0	0	0	0	3	0	79	1.28
30-34	4	1	6	8	2	3	0	0	0	0	0	0	0	26	0.42
35-39	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.06
40-44	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.03
45-49	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
50-54	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.03
55-59	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
60-64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
65-69	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
70-74	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
75-79	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
80-84	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
85-89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
90-94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
100-104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
105-109	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
計	3,138	2,934	29	42	7	9	0	1	0	0	1	3	1	6,165	99.96
ステータス比(%)	50.90	41.59	0.47	0.68	0.11	0.14	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.04	0.01		99.96

四世人口

総数 : 51,593  
 三世人口 : 6,165 (総数に占める割合 : 11.94%)  
 男性数 : 3,175 (四世人口に占める割合 : 51.50%)  
 女性数 : 2,989 (四世人口に占める割合 : 48.48%)  
 無回答 : 1 (四世人口に占める割合 : 0.01%)

表32 年令ステータス性別五世人口 (1989年) ステータス

ステータス 年令/性別	独身		既婚		同棲中		死別		離婚		別居中		無回答	合計 年令	対年令 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
0-4	40	39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	79	50.00
5-9	23	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	44	27.84
10-14	16	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	15.82
15-19	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	4.43
20-24	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63
25-29	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63
30-34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
35-39	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63
40-44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
45-49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
50-54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
55-59	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
60-64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
65-69	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
70-74	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
75-79	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
80-84	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
85-89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
90-94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
100-104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
105-109	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
計	85	72	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	158	99.98
ステータス比(%)	53.79	45.56	0.63	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		99.98

五世人口

総数 : 51,593  
 五世人口 : 158 (総数に占める割合 : 0.30%)  
 男性数 : 86 (五世人口に占める割合 : 54.43%)  
 女性数 : 72 (五世人口に占める割合 : 45.56%)  
 無回答 : 0 (五世人口に占める割合 : 0.00%)



一方、世代別にみると、三世、四世、五世の世代では独身者の割合が圧倒的に多く、それぞれ 81.24%, 92.49%, 99.35%となっている。これは、いうまでもなく、これらの世代に属する者の大半の年齢が低いことが起因している。他方、一世と二世の世代の既婚者の割合は、それぞれ 54.38%, 65.64%という集計結果である。

一世と二世で配偶者と死別したケースは、それぞれの世代人口の39.88%, 7.16%に相当する。一世の場合には、配偶者と死別した者は年令的に70才から89才に集中しており、夫を亡くしたケースの方が妻を亡くしたケースより5倍近く多く記録されている。同じことを二世につきみると、年令的には、一世の場合より若く、45才から69才に集中。更に、未亡人の数は、妻に死別した男（やもめ）より約七倍多い。これは、先にも述べたように、女の方が男より寿命が長いことを反映している。

同棲中の者の割合は各世代に共通し、1%以下であり、離婚者についても同様である。但し、離婚者については、二世については、この数字を上回る結果がでている。一方、別居中の者も、その割合は各世代とも1%以下となっているが、この場合も、二世については例外で、1.87%（285名）と他の世代より多く、また男より女に多く記録されている。別居中の女性を世代別に比較すると、一世に比べ二世及び三世の世代にかなり増えている。

同棲中の者、離婚者、別居中の者は数的には少ないが、世代別では二世及び三世の世代に多くなっている。

a. 4. 地理的分布： 1989年の実態調査では日系人が居住しているという情報が得られた地区は全て調査対象とした。これを行政区分（県と市）で見ると、実態調査実施地域は20県に及び、従来、日系人が在住していない地域とされるアマゾナス県、ワンカベリーカ県、アプリマック県及びプーノ県は調査対象から外した。これらの地域にも日系人が在住している可能性がないわけではないものの、たとえ在住していたとしても、その数はわずかなはずで、本調査の総合結果に変動をきたす数ではないと思われる（表33参照）。1989年の実態調査と1966年のそれとの違いは、まず第一に、1966年の調査時には計16県を調査対象地域とし、今回の調査で新たに加えた次の5県については、当時何ら情報がないままに集計を行なっている点である（表34参照）。今回新たに調査地域として考慮した5県とは、サン マルティン県、モケグア県、アヤクーチョ県、カハマ

ルカ県及びウカヤリ県であった。なお、最後のウカヤリ県については1966年以降に創設されたものである。他方、1966年の調査時には、今回調査対象から外したプーノ県においても調査が行なわれている。

図4 日系人口の地理的分布 (1989年)



表 3 3 日系人口 (1989年)

県別分布

県	男	女	計	%
リマ	18,875	19,617	38,492	84.33
ラ リベルタッド	795	838	1,633	3.58
マドレ デ ディオス	454	402	856	1.88
ランバイエーゲ	349	409	758	1.66
フニン	378	348	726	1.60
アンカシュ	350	327	677	1.48
イーカ	210	247	457	1.00
サン マルティン	216	188	404	0.89
ロレート	220	181	401	0.88
アレキパ	188	169	357	0.77
ピウラ	154	139	293	0.64
ウカヤリ	109	96	205	0.45
クスコ	63	54	117	0.26
ワヌコ	53	56	109	0.24
モケグア	21	18	39	0.09
アヤクーチョ	17	19	36	0.08
タクナ	15	15	30	0.06
ツンベス	10	10	20	0.04
カハマルカ	6	4	10	0.02
セーロ デ バスコ	2	—	2	0.00
無回答	—	66	22	0.05
計	22,485	23,137	45,644	100.00

図 5 日系人口地理的分布 (1966年)

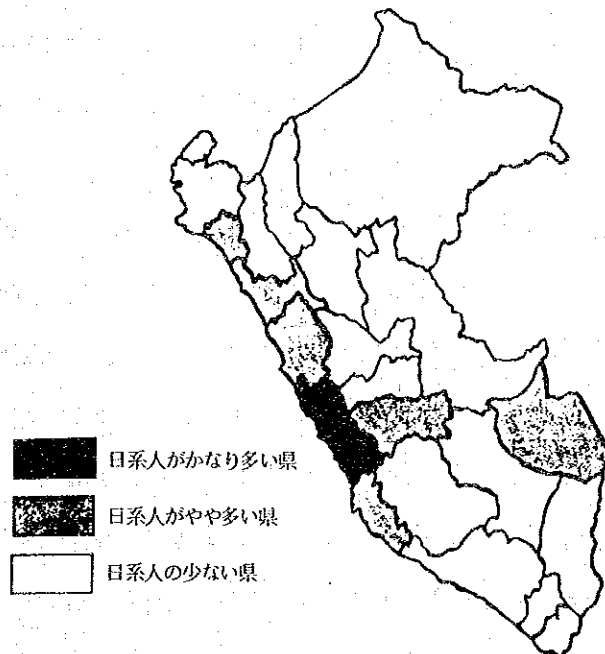


表3.4 1966年と1989年の実態調査結果比較表

日系人口の県別分布

県	1966(1)				1989			
	男	女	合計	%	男	女	合計	%
リマ	13,910	13,065	26,975	84.29	18,875	19,617	38,492	84.33
ラ・リベルタッド	724	704	1,428	4.46	795	838	1,633	3.58
マドレ・デ・ディオス	245	189	434	1.36	454	402	856	1.88
ランバイエーケ	289	242	531	1.66	349	409	759	1.66
フニン	473	418	891	2.78	378	348	726	1.60
アンカシュ	206	177	383	1.20	350	327	677	1.48
イーカ	271	288	559	1.75	210	247	457	1.00
サン・マルティン	—	—	—	—	216	188	404	0.89
ロレート	39	33	72	0.22	220	181	401	0.88
アレキパ	41	33	74	0.23	188	169	357	0.77
ピウラ	96	91	187	0.58	154	139	293	0.64
ウカヤリ	—	—	—	—	109	96	205	0.45
クスコ	55	35	90	0.28	63	54	117	0.26
ワヌコ	148	128	276	0.86	53	56	109	0.24
モケグア	—	—	—	—	21	18	39	0.09
アヤクチョ	—	—	—	—	17	19	36	0.08
タクナ	17	6	23	0.07	15	15	30	0.06
ツンバス	2	1	3	0.01	10	10	20	0.04
カハマルカ	—	—	—	—	6	4	10	0.02
セーロ・デ・パスコ	22	29	51	0.16	2	—	2	0.00
プーノ	12	13	25	0.08	—	—	—	—
無回答	—	—	—	—	—	—	22	0.05
計	16,550	15,452	32,002	99.99	22,485	23,137	45,644	100.00

(1) 1966年の調査報告書では日系人口の地理的分布は地域及び市別に集計されており（「ペルー国における日系人社会」96頁と97頁参照）、この県別集計は1989年次との比較目的で今回作成したもの。

上表に示したように、日系人口はリマ県内に圧倒的に集中している。リマ県内在住者は、実数では、1966年調査時の26,975人に対し、1989年調査時には38,492人と大きな伸びを記録しているにもかかわらず、日系総数に占めるリマ県内在住者の割合でみると、1966年の84.29%に対し、1989年は84.33%と、ほとんど変動がない。ラ・リベルタッド県<sup>(\*)</sup>についても同様の現象が起こっており、しかも同県の場合には、全人口に占める比率がいつれの調査でも1.66%という結果がでていいる。〔(\*) 訳者注：原文（91頁）にはラ・リベルタッド県とあるが、表3.4からみるに、ランバイエーケ県の誤りと思われる。〕

日系総人口に占める県別の人口比率で、1966年調査時と比し、増加を記録したのは、マドレ・デ・ディオス県、アンカッシュ県、ロレート県、アレキパ県及びピウラ県である。一方、日系総人口に対する比率が減少したのは、ラ・リベルタッド、フニン、イーカ、クスコそしてワヌコの各県である。こうした増減現象の一因には、国内における転出入、すなわち、一県から他県への移転が考えられる。なお、以上に挙げた県以外の県に

おける日系人口の数は少なく、日系総人口に占める比率についても、1966年調査時と1989年調査時では、ほとんど増減が記録されていない。

ラ リベルタッド県に在住する日系人の数は、1966年調査時に比べ減少はしているものの、リマ県に次いで日系人口が集中している県であることは、当時と変わっていない。1966年調査時には県別にみる日系人口が3番目に多かったフニン県は、今回の調査結果では5位に落ちている。一方、マドレ デ ディオス県については、日系人口が1966年以降ほぼ倍増した結果、1966年調査時には県別で5位に位置していたが、今回の調査では3位となっている。

同様に、指摘しておくべきことは、県によっては、県内に広く散在しているのではなく、特定の市又は地区に集中していることである。例えば、マドレ デ ディオス県の場合ではプエルト マルドナードとイベリアに集中、フニン県の場合にはハウハ、タルマ、チャンチャマーヨ、サティーボ、そしてコンセプションに、ラ リベルタッド県の場合にはツルヒーリョに、アンカッシュ県についてはチンボーテに、それぞれ集中している。一方、リマ県内在住の日系人は、リマ市に圧倒的に多く、その他カヤオ、ワラル、チャンカイ、ワーチョ、バランカ、パラモンガ、スーベ、カニエーテ、マラの各市に集中している。イーカ県についてはピスコ、ナスカとイーカ市に、サン マルティン県についてはタラポトに、ロレート県についてはイキートスに、アレキパ県についてはアレキパ市にそれぞれ集中。更に、ウカヤリ県ではプカルパに、クスコ県の場合にはクスコ市に、モケグア県ではイーロ市に、アヤクーチョ県の場合にはアヤクーチョ市に、ツンベス県ではツンベス市に、カハマルカ県ではカハマルカ市に、そしてパスコ県ではセーロ デ パスコ市に、それぞれ日系人が集中しているという結果がでている。

以上からわかるように、日系人は県庁所在地に集中している傾向があり、都市部の場合には、主に商業地域そして一部は農村地域に、それぞれ居住している。

リマ県：ペルーの首都であるリマ県は、初期の日本人移民者が入国した頃から、日本人・日系人の最多集中都市となっている。ペルー国内において地方からリマへの人口流入現象は殆ど後を絶たず記録されているが、これがリマ在住日系人口増加の最大要因の一つとなっている。こうした結果、今回の調査時には日系総数の84.33%にあたる38,492人がリマに在住していると集計された。

リマ県内では、リマ市内、基本的には、リマ首都圏内の在住者数が最も増加を記録。

《図6》 リマ・カヤオにおける日系人口分布

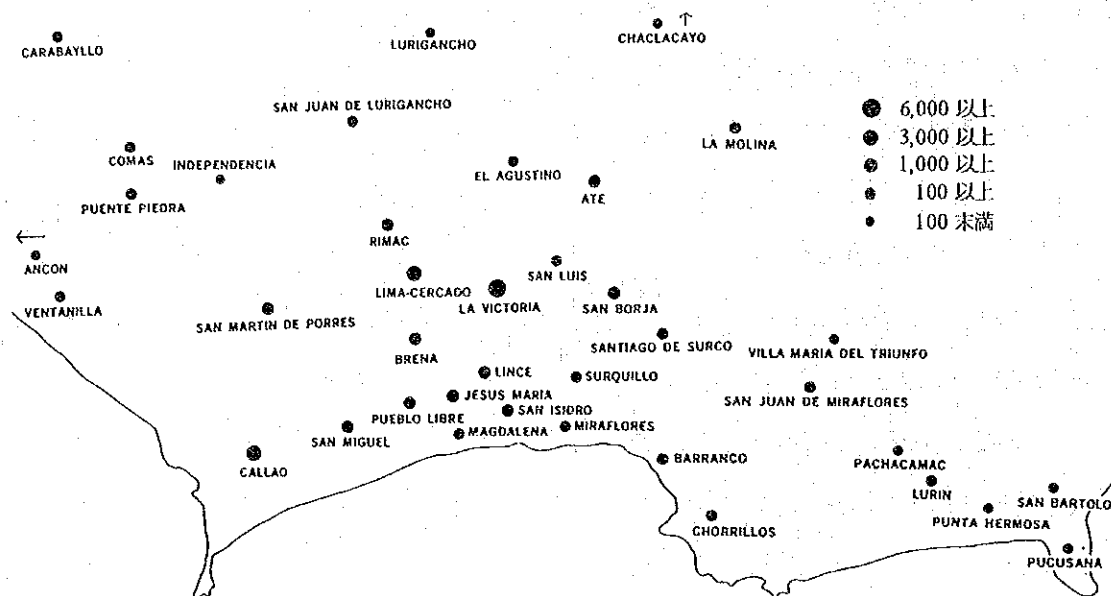


表 3.5 リマ県における日系人口推移 (1966年と1989年)

市	1966 (1)				1989			
	男	女	計	%	男	女	計	%
リマ	11,000	10,352	21,352	79.15	15,714	16,480	32,194	83.64
カヤオ	1,205	1,076	2,281	8.46	1,362	1,372	2,734	7.10
チャンカイ(2)	—	—	—	—	72	72	144	0.37
ワラル	603	578	1,181	4.38	720	688	1,408	3.66
ワーチョ	814	763	1,577	5.85	677	676	1,353	3.52
カニエーテ	288	296	584	2.16	330	329	659	1.71
計	13,910	13,065	26,975	100.00	18,875	19,617	38,492	100.00

(1) 1966年の調査では地域別の人口集計がなされていないので、今回比較対象のため、調査報告書の資料（「ペルー国における日系人社会」1969、96～97頁）を基に、県別の集計を行なったもの。

(2) 1966年の調査報告書ではワラルのみのデータが集計されているが、これは当時ワラルがチャンカイ市に属していたためである（市役所所在地はワーチョであった）。現在では、チャンカイ、ワラル、ワーチョはそれぞれ独立した市となっている。

その結果、1966年調査時に比し、日系総数に占める比率も最も大きな増加を記録した（表3.5参照）。数的には、1966年調査時のリマ市内在住日系人口は21,352人、リマ県内在住日系人口に占める比率が79.15%であったのに対し、1989年調査時のそれは32,194人に達し（1966年調査時の日系総人口を上回っている）、これはリマ県内在住

人口の83.64%, 日系総人口の70.53%に相当する。

リマ県内でもリマ市以外の市については、市により実数では多少の増減が記録されたが、日系人の集中度が高いという点では、従来と変わりがない。なかでもカヤオは、1966年調査時と同様に、リマ市に次いで日系人の数が多い。カヤオに次いで、ワラルーチャンカイ地域、ワーチョ、カニエーテの順となっている。

以上の結論として、日系人口の地理的分布には大きな変動は記録されていないと断定できる。他県あるいは他市からの転出入は、従来と同様、記録されているが、その数はさほど多くはなく、従来から日系人が住んでいたところに日系人が住まなくなったというところはない。1966年と1989年の実態調査結果を比較すると明らかなように、県あるいは市によってはその数に増減こそあれ、日系住民が記録されていることには変わりがない。

表36 他県からリマ県への人口流入数 (1989年)

流入した年/理由	就学	就職	その他	計
Antes de 1980	374	262	107	743
1980	45	18	5	68
1981	44	18	5	67
1982	47	9	2	58
1983	50	10	7	67
1984	35	13	8	56
1985	49	24	5	78
1986	63	20	5	88
1987	55	12	6	73
1988	61	20	8	89
1989	32	6	8	46
計	855	412	166	1433
%	59.66	28.75	11.58	99.99

表37 リマ首都圏とカヤオにおける在住期間

在住期間(年)	男	女	計
1-5	537	580	1117
6-10	559	629	1188
11-15	497	526	1023
16-20	618	737	1355
21-25	460	560	1020
26-30	550	563	1113
31-35	349	343	692
36+	1652	2019	3671
計	5222	5957	11179

表 3 8 世代別リマ首都圏とカヤオにおける在住期間

在住期間(年)	一世	二世	三世	四世	五世	五世以降	計
1-5	36	158	465	224	7	0	890
6-10	43	223	480	168	2	0	916
11-15	49	243	371	83	3	0	749
16-20	96	425	444	34	0	0	999
21-25	158	348	226	12	0	0	744
26-30	232	466	148	0	0	1	847
31-35	82	381	64	2	0	0	529
36+	1482	1576	77	3	0	0	3138
計	2178	3820	2275	526	12	1	8812

a. 5. リマへの人口流入 日系人のリマ県への転入数を把握するため、調査用紙に2問の質問を設けた。これには、日本人移住初期の頃からリマ県内に日系人口が集中していたという歴史的背景と、ペルー全体にリマへの人口流入現象が起こって久しく、その一部として、日系人のリマ流入が発生しているものと想定した。

具体的には、これらの質問は出身地がリマ首都圏またはカヤオ以外の者を対象としたもので、リマ首都圏またはカヤオにおける在住期間と、同地に転入した年または出身地を離れた年を尋ねるものであった。この調査結果は表3 6及び表3 7に示すとおりであるが、2問に対する回答結果が一致しないという事態が生じた。これは、リマ首都圏やカヤオ以外の出身者にとっては、大体のリマ在住期間は思い出せても、出身地を離れた年は記憶していないケースが多いことに起因すると考えられる。

しかしながら、上記2問で得られた回答結果は、リマへの転入動機として、特に若者の間では、就学（主要大学への入学）と就職が挙げられている、以前に実施された調査結果の確認を可能としている意味では、貴重なデータとなっている。因みに、就学理由による転入がリマ転入者全体の59.66%を、そして就職理由による転入が同28.75%を、それぞれ占めている。

他方、リマ首都圏及びカヤオにおける在住期間については（表3 7）、調査対象とした36年間、まずは常時平均した転入があることがわかる。また、リマ首都圏及びカヤオへの転入者の世代別在住期間をみると（表3 8）、二世が最も長いという結果がでている。表3 6に示す結果と照合すると、二世の世代では人生の転機とするため、出身地を捨て首都へ移り住んだケースが多いことがわかる。



a. 6. 外国への移住 本実態調査結果のうちで、一部日系社会で最も期待されていたことの一つは、現在記録されている日本への出稼ぎ関連である。日系人の日本への出稼ぎは実態調査開始数ヶ月前から発生し、その後加速化されていた現象である。

言うまでもなく、本調査でも、この点に関しては、出来るだけ広範な情報取得を意図した。ここで行なった想定は、外国への移住は最近起こった現象ではないということで、これは、様々な情報から、個人或いは家族単位での外国への移住がそれ以前から常時記録されていたことが判明しており、日系社会でこの移住現象がピークに達した時期は、ちょうどペルー人全般の外国移住現象がピークに達した時期と一致する。換言すれば、経済、政治・社会情勢に起因する外国への出稼ぎ現象が日系社会にも起こったということである。この想定に従い、移住先国、移住時期、移住の動機に関する情報取得目的で、調査用紙にこの点に関する質問を1問設定した。

こうして得られた結果によると、移住先国の中では、アメリカ合衆国と日本が最も多かった。表39と表40を比較すると、1988年（日本への移住現象が始まった年）以前は、アメリカ合衆国への移住が日本へのそれを上回っていたが、1988年以降をみると、日本への移住が急増している。因みに、現在まで記録されている日本への移住者総数のうち、55.71%が1988年から1989年1月31日にかけて発生したものである。

移住先国は違っても、動機は同じで、アメリカ合衆国へ渡った者のうち64.79%は求職目的、26.58%は勉強目的という集計結果がでている。一方、日本への行った者の動機は、66.33%が就職のため、18.91%が勉強のためであった。

1988年から1989年1月31日の間に記録された日本への渡った者に関するデータをまとめたのが表41である。同表によると、日本への移住者の88.35%はその年齢が20才から54才で、これは日本での雇用機会提供者が示した年齢制限範囲とほぼ一致している。また世代別にみると、大半が二世と三世であり、比率で見ると、55.53%が三世、38.83%が二世という結果である。

最後に、一つ強調しておきたいことは、本報告書のデータ全てに共通することであるが、ここで扱っているデータも一実態調査の結果であるということである。

表39 動機別アメリカ合衆国への移住者推移

年次	勉学	就職	その他	計	%
A 1985	130	332	49	511	58.80
1985	16	60	5	81	9.32
1986	7	41	2	50	5.75
1987	28	34	4	66	7.60
1988	37	81	13	131	15.08
1989	13	15	2	30	3.45
計	231	563	75	869	100.00
%	26.58	64.79	8.63	100.00	

表40 動機別日本への移住者推移

年次	勉学	就職	その他	計	%
A 1985	101	109	76	286	28.92
1985	11	27	13	51	5.16
1986	10	28	15	53	5.36
1987	14	23	11	48	4.85
1988	38	270	22	330	33.37
1989 (*)	13	199	9	221	22.34
計	187	656	146	989	100.00
%	18.91	66.33	14.76	100.00	

(\*) 1989年1月31日現在

表41 日本への移住者 1988年～1989年(\*)

現在年齢	人	%
0-4	7	1.27
5-9	3	0.54
10-14	6	1.08
15-19	34	6.17
20-24	127	23.04
25-29	106	19.23
30-34	108	19.60
35-39	71	12.88
40-44	37	6.71
45-49	27	4.90
50-54	11	1.99
55-59	5	0.90
60-64	3	0.54
65-69	3	0.54
70-74	0	0.00
75-79	3	0.54
80-84	0	0.00
85-89	0	0.00
90-94	0	0.00
95-99	0	0.00
無回答	0	0.00
計	551	99.93%

(\*) 1989年1月31日現在

表4 2 日本への移住者 1988年～1989年(\*)

世代	人	%
一世	31	5.63
二世	214	38.84
三世	295	53.54
四世	11	1.99
五世	0	0.00
計	551	100.00%

(\*) 1989年1月31日現在

以上と異なるデータも色々あるが、公式データと考えられているもののなかにも、この日本への出稼ぎ者数については矛盾点がある。これは、日本への不法入国問題があったり、その他、この日本への出稼ぎが、複雑かつ係争的な様相を呈しているため、情報を隠匿したり、偽造したり、或いは情報提供を拒否するケースもあり、情報確認を困難としているからである。ここに紹介したデータについても、1988年～1989年の実数については疑問の余地が残るが、前出の想定の確認を可能とし、本実態調査の目的には有効な結果である。

a. 7. 混血化と非日系人との関係 調査方法を述べた章で詳説したように、本調査では、調査対象単位を住居及び生計を共にする血族、すなわち家族経済単位とした。日系人と非日系人との区別にあたっては、基準として何世代に属するか（各世代のコード番号は1、2、3、4、5）とした。世代に属していない者のコードは「0」とし、当然の如く、このコードに属する者は非日系人となる。

このような結果、調査対象世帯のなかには、日系人と姻族関係にある非日系人が家族の一員となっているケースが少なくないことがわかった。

このような考慮の結果、表4 3に示すように、調査対象者総数は51,593人と集計されたが、このうち日系人総数が45,644人であり、従って調査対象者総数の11.53%は非日系人という結果になる。

一方、今回調査対象となった非日系総数うち84.58%にあたる5,032人は日系人の配偶者であった（表4 4参照）。また、これを男女別で見ると、女2,693人に対し、男2,339人で、日系人で非日系人と婚姻するケースは男の方に多い結果となった。

この結果を、先にみた男女別個人のステータス結果と照合してみると、日系人の既婚

者及び同棲者総数（15,329人）のうち、32.93%にあたる5,032人につき、その配偶者は非日系人であると結論できる。男女別では、男の場合、既婚者及び同棲中の者全体（計7,765人）の34.68%に相当する2,693人の配偶者または同棲相手は非日系人である。一方、女の場合、その数は、既婚者及び同棲中の者（7,564人）の30.92%に相当する2,339人となっている。すなわち、日系人口の約3割は非日系人と婚姻又は同棲しており、男女別では男の方にその比率が高い。

次に表44をみると、日系人夫婦が法的手続きを踏み、非日系人との間に養子縁組した件数は計209件記録されており、“養子”の男女別数字は男90に対し、女119となっている。なお、この数字は今回調査対象となった非日系総数の3.51%に相当する。

“親類”とは、日系人とは直接血縁関係はない者（例えば、義父母、義兄弟、甥、姪、伯父等）が、経済家族単位を構成している者をさす。これに該当する者は、男166人、女527人(\*)の計693人で、非日系人総数の11.65%を占める。〔(\*) 訳者注：原文には「693」とあるが、男女数の合計があわないこと、更に表44からも「527」の誤りと確認される。〕

図7 非日系人との関係

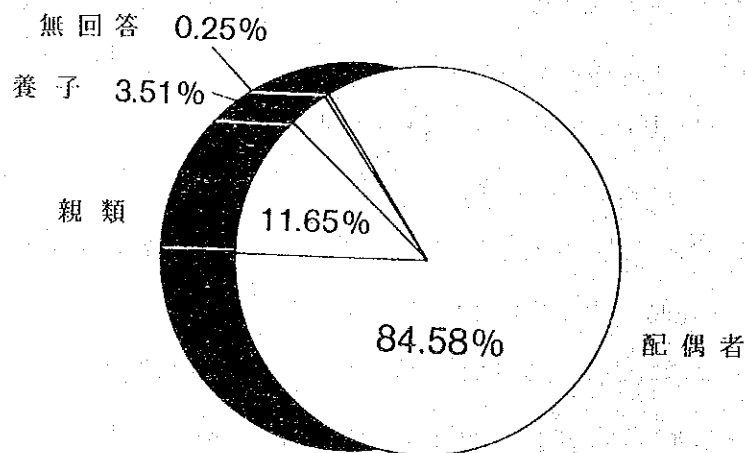


表 4 3 年齢層別日系人口 (1989年)

0-4	3,695
5-9	4,439
10-14	5,218
15-19	5,101
20-24	4,540
25-29	3,690
30-34	3,719
35-39	3,685
40-44	3,490
45-49	3,404
50-54	3,292
55-59	2,512
60-64	1,593
65-69	879
70-74	634
75-79	640
80-84	437
85-84	235
90-94	62
95-99	21
99以上	0
無回答	37
計	51,593

表 4 4 日系人との関係及び性別非日系人口 (1989年)

関係	男	女	計	%
配偶者	2,339	2,693	5,032	84.59
養子	90	119	209	3.51
親類	166	527	693	11.65
無回答	—	—	15	0.25
計	2,595	3,339	5,949	100.00

他方、先にみた日系人口の市及び県別人口、未婚・既婚等ステータス世代別人口を示した表と、居住地別調査総数を示す表を照合すると、各ケースの非日系人口の平均(x)が得らる。すなわち、各県別日系人口と非日系人口の実数を照合することにより求められる。

このような作業の結果、平均総数のうち23.68%は非日系人であり、男女別比率は、男19.78%、女26.92%と推計された。

同様にリマ県在住者とリマ県外在住者間で平均値を求めた結果、リマ県外在住者の24.60%、リマ県内在住者の8.9%は非日系人となる。また、これを男女別でみると、リマ県外在住者中の非日系人平均比率は、男20.52%、女28%で、リマ県内在住者の平均は男8%、女9.7%と推計される。

換言すると、非日系人との姻族関係の有無については、リマ県と他県とでは著しい格

差がある。リマには、日系総人口の84.33%が集中している一方で、混血化は、日系人口が比較的少ない他県に比し、限定されているといえる。

a. 8. 学歴 初期移住者が来秘した頃から、日系社会が重視している点の一つは教育についてである。

この点については、1989年の実態調査結果が貴重なデータを提供している。最終学歴に関するデータ（表45）により、日系社会の教育現状を把握できるが、これによると、日系社会の教育水準に変化がみられ、世代が進むにつれ高くなっていることがわかる。

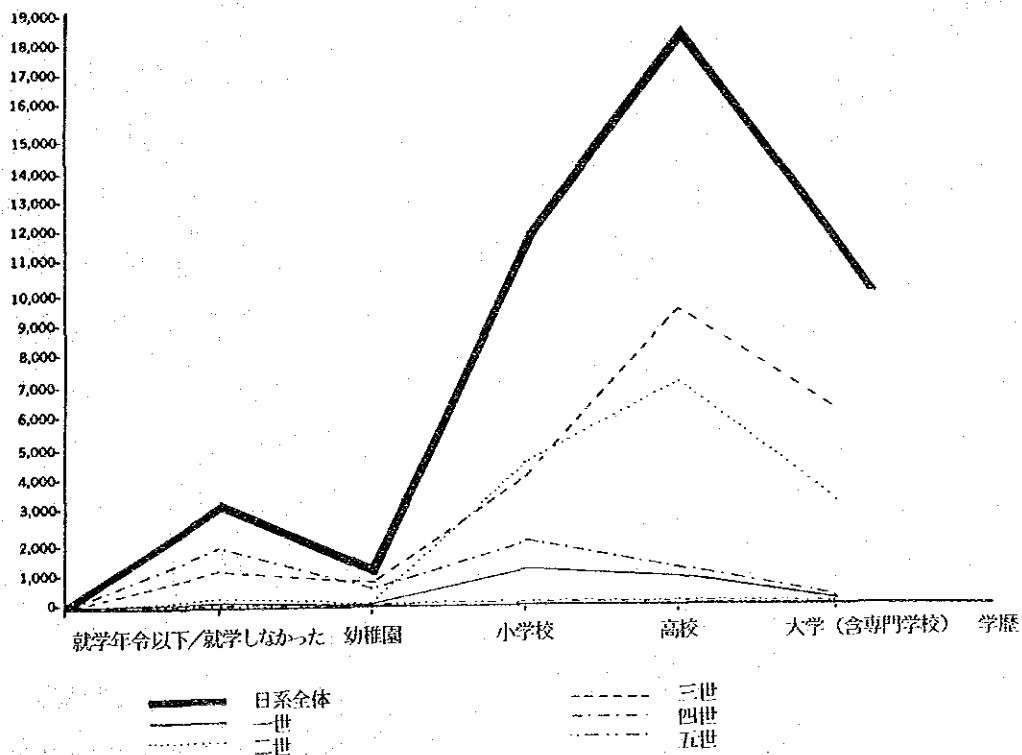
総体的にみると、高校生や高卒者が18,683人と最も多く、日系総数の40.93%を占めている。次に多いのは小学生や小学卒で、日系総数の25.88%に相当する11,813人に達し、就学年令にある三世、四世、五世の世代が大半を占める。成人で小学卒の者は、世代的には一世と二世に属している。大学生（専門学校も含む）や大卒者（同）の数は3番目に多く、日系総数の22.21%に相当する10,139人がこれに該当し、年令及び世代別にみると、3世、2世及び1世の世代に集中している。

年令的に就学年令に達していない幼児が属する世代は、多世代にわたるが、特に4世と3世の世代に多い。年令と世代別に学歴を示す表をみると、成人のなかで学校へ行かなかった者は、世代別では一世及び二世の世代に属している。しかしながら、その数は非常に少なく、日系総数の約0.39%に過ぎない。

世代別学歴をみると、一世の世代で最も多いのは小学生及び小学卒で、一世人口の48.82%、1,123人がこれに該当する。これに対し、高校生及び高卒者は37.74%に相当する868人で、大学生（専門学校も含む）及び大卒者（同）は8.43%、194人となっている。また正規教育を受けなかった者及び就学年令に達していない者は115人で、うち6人は年令が5才以下である。従って、成人で学校へ行かなかった者は109人で、一世人口の4.74%を占める。二世の世代についてみると、最も多いのは高校生及び高卒者で、二世人口の43.42%に相当する7,113人がこれに該当する。次いで多いのは、小学生及び小学卒で、二世人口の29.38%に相当する4,449人、3番目は大学生（専門学校も含む）及び大卒者（同）で22.25%に相当する3,370人となっている。学校へ行っていない／行かなかった者は211人で、このうち106人は5才以下の乳幼児であり、従って、学校教育を受けなかった成人は105人、二世人口の0.69%に相当する。

三世の世代について同様のことをみると、高校生及び高卒の数が、二世の場合と同様、最も多く、三世人口の43.42%に相当する9,455人がこれに属す。次いで多いのは大学生（専門学校も含む）及び大卒者（同）、そして小学生及び小学卒者の順で、その数は、それぞれ6,313人、4,139人で、比率では三世人口のそれぞれ28.99%、19%を占める。三世人口で年齢18才以下の者は11,545人と記録されており、また学校へ行っていない者、小学卒者、高卒者の数が15,463人に達することから、成人で小学校以上の学歴がある者は10,231人と推計される。また、このうち6,313人が大学生及び大卒者であるとすれば、3,918人が学校へ行っていない者と高校生または高卒者に該当することになる。従って、成人三世で正規の教育を受けなかった者は皆無となる。

図8 学歴と世代



四世の学歴をみると、小学生が全体の33.69%に相当する2,057人で最も多く、高校生及び高卒、大学生及び大卒が、それぞれ19.98%、4.29%を占め、数的にはそれぞれ1,220人、262人となっている。この世代には就学年令に達していない年齢5才以下の乳幼児が42%、2,556人記録されている。

五世については、学校へ行っていない者は91人で、五世人口の57%を占める。なお、

表4.5 学歴と世代 (1989年)

学歴	一世	二世	三世	四世	五世	五世以下	計	%
就学年令以下/就学しなかった	113	165	1,165	1,911	71	0	3,425	7.50
幼稚園生/幼稚園卒	2	46	704	656	20	0	1,428	3.13
小学校/小学卒	1,123	4,449	4,139	2,057	43	2	11,813	25.88
高校生/高卒	868	7,113	9,455	1,220	25	2	18,683	40.94
大学生/大卒(*)	794	3,370	6,313	262	0	0	10,139	22.21
無回答	0	0	0	0	0	0	156	0.34
計	2,300	15,143	21,776	6,106	159	4	45,644	100.00

(\*) 専門学校を含む

この91人のほぼ全員が年令5才以下の乳幼児である。また、小学生は全体の27%に相当する27人、高校生は15.72%の25人記録されている。この世代の大半は乳幼児及び未成年であり、そのために、大学生は記録されておらず、また、この世代の成人で正規教育を受けなかった者も記録されていない。

以上の結果として、日系社会の学歴は総体的に高く、高校生及び高卒、大学生(専門学校を含む)及びは大卒者(同)が、日系総人口の63.14%を占めている。

同様に、世代別に学歴の違いがあることをみた。例えば、一世及び二世の世代には正規の教育を受けなかった者が記録されているのに対し、三世及び三世以降の世代の成人は、なんらかの学校教育を受けている。また、世代が進むにつれ、高学歴の者(高校及び大学教育を受けている者)の比率が高くなっている。但し、この傾向は、その大半の年令がそこまで達していない四世及び五世の世代では顕著ではないが。

a.9. 家族構成 1989年の実態調査における調査対象世帯数は11,147、計51,593人に登った。

これら調査対象世帯の家族構成に従い、世帯を8つのタイプに分類した(表4.6参照)。このうち最も多かったのは、核家族、すなわち親子二代のみで構成される家族が、全体の49.99%に相当する5,573世帯記録された。



表 4 6 家族形態 (1989年)

タイプ	世帯数	%
核家族	5,573	50.00
親子3代同居	2,045	18.35
大人1人にその子供又は 未成年の血縁者の同居	1,375	12.34
夫婦又は同棲者の2人暮らし	604	5.41
複数の成人	581	5.21
成人の一人暮らし	522	4.68
2家族以上	435	3.90
非家族集団	3	0.03
無回答	9	0.08
計	11,147	100.00

核家族に次いで多かったのは、親子2代と血縁関係者の同居で、このケースの大半は三世帯世帯であった。この形態に属する世帯数は2,045世帯、全体の18.34%を占めている。

次に多かったのは、男女を問わず大人一人に子供、または未成年の血縁者が同居しているケースで、1,375世帯、12.33%を占めた。

成人だけで構成されている世帯がかなり記録された。これは、成人が何人か同居しているケースで計581件、全体の5.21%を占め、このケースの大半は兄弟または血縁関係者の同居であった。成人の一人暮らしは522件、4.68%を占めた。夫婦又は同棲者の2人暮らしは604件、全体の5.41%で、その大半は夫婦のケースであった。

興味深いのは、核家族又は親子3代同居家族が2家族以上同居しているケースが記録されたことで、中には、全員血縁関係にある20人または30人が同居しているケースも記録された。

最後に、血縁関係にない者が同居しているケースが3件、全体の0.02%あった。

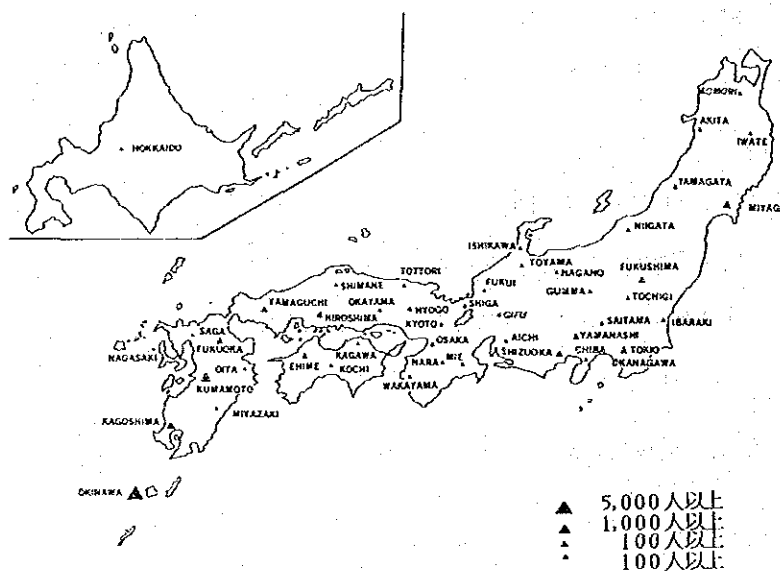
**一世の出身地と家族数：** 日系社会において常に興味もたれていることは、ペルー在住年数が数十年に及ぶにもかかわらず、一世すなわち日本人移住者の出身地に関するテーマである。ペルー日系社会では、出身地に対する関心度が高く、そのことは出身都道府県に因んだクラブ及び団体組織が数十も存在することからも測り知れる。

都道府県別に加え、もっと広範にわたる地域単位による言及や比較も頻繁に行なわれている。すなわち、日本の本州、四国、九州、北海道及び琉球列島を、ペルー日系社会では、二地域に分け、本州、四国、九州及び北海道を一地域とし、琉球列島全域と対比させている。この琉球列島全域を指し、同列島最大の島、沖縄の名で総称し、“沖縄人”と呼

んでいるのに対し、前者地域出身者を“内地人”と呼び、それぞれを区別している。

1989年の実態調査では、回答があった出身地として名が挙げられた都道府県は計46におよび、また先祖の出身地がわからないと回答したケースは701件記録された。また、調査対象世帯11,147世帯のうち、46.46%に相当する5,180世帯が沖縄出身で、回答された沖縄県内または琉球列島内の市、群、村等の名は、計60に達した。中には小さな村等の名だけを答えたケースも多くあり、より大きな行政管轄区域を照会する作業の必要がでた(表47及び表48参照)。

《図9》 移民者の出身地(都道府県別)



沖縄に次ぎ移住者の出身地として多かったのは、熊本県(1,024)、広島県(600)、福岡県(597)、福島県(433)、山口県(418)、鹿児島県(362)、山梨県(235)、宮城県(207)、愛媛県(139)の順であった。その他の県名も回答としてあったが、数的には少ないものであった。また、東京都出身と回答のあった世帯数は202件記録されたが、現在までに行なわれている調査によれば、東京都出身移住者の数はごく限定されており、この数字には疑問の余地が残る。今は亡き先祖の出身地がわからないために、よく知られている日本の首都の名を挙げたケースがあるのではないかとと思われる。

表 4 7 一世の出身地別世帯数

県	世帯数	県	世帯数
沖繩	5,180	佐賀	29
熊本	1,024	千葉	25
広島	600	長野	25
福岡	597	長崎	24
福山	433	茨城	16
山口	418	島根	16
山梨	362	福井	14
山梨	235	兵庫	14
宮城	207	三重	14
東京	202	栃木	14
東海	139	富山	13
静岡	126	埼玉	9
大分	72	北海道	8
新潟	67	群馬	6
和歌山	66	高知	6
大阪	65	鳥取	4
岡山	64	青森	3
山形	63	岩手	3
奈良	57	秋田	3
滋賀	55	宮崎	2
京都	49	石川	2
岐阜	43	福井	1
香川	38	無回答	701
愛知	33		
		計	11,147

表 4 8 沖繩県内出身地別世帯総数

市町村名	世帯数	市町村名	世帯数
AWASE	26	NAGO	331
AZA ATTA	2	NAHA	98
CHATAN	111	NAKAGAMI	7
CHINEN	51	NAKAGUSHIKU	8
CHIUNYUN	1	NAKAGUSUKU	283
FUTAMI	2	NAKAZATO	1
GALLA	2	NAKUIN	45
GINOWAN	81	NISHIHARA	236
GINOZA	49	OGIMI	72
GUSHICHIAN	13	OKINAWA KEN	1,573
GUSHIKAMI	2	OKINAWA SHI	334
GUSHIKAWA	373	ONNA	4
HAEBARU	26	OROKU	1
IIGASHI	6	OZATO	48
IIEYA	5	SASHIKI	40
ISADO	1	SHIMAJIRI	22
ITOMAN	112	SHIODA	1
IZENA	28	SHURI	22
KADENA	4	SOESHI	3
KANAGUSUKU	16	TAISHIKOKU	1
KATSUREN	102	TAMAGUSUKU	2
KIN	32	TAMANA	2
KITANAKAGUSUKU	125	TAMASHIRO	72
KOCHINDA	60	TOBARU	1
KOZA	22	TOMIGUSUKU	33
KUMEJIMA	19	URASOE	54
KUNIGAMI	45	YAMAKAWA	1
MISATO	35	YOMITAN	14
MIYATO	2	YONABARU	189
MOTOBU	244	YONASHIRO	85
		計	5,180

表 4 9 沖縄出身世帯

一世帯当り家族数	世帯数	人
1	198	198
2	390	780
3	714	2,142
4	1,044	4,176
5	1,041	5,205
6	652	3,912
7	392	2,744
8	230	1,840
9	139	1,251
10	65	650
11	61	671
12	17	204
13	17	221
14	7	98
15	6	90
16	3	48
17	0	0
18	0	0
19	0	0
20	1	20
21	1	21
22	0	0
23	0	0
24	0	0
25	0	0
26	0	0
27	1	27
28	0	0
29	0	0
30	0	0
31	3	93
計	4,982	24,391
無回答	198	—

世帯総数 : 11, 147      日系総人口 : 45, 644  
 沖縄出身世帯数 : 5, 967      沖縄出身人口 : 21, 253

先にのべた地域別に分けた数を把握するためには、沖縄出身世帯数をもとに求めた。この沖縄出身世帯の一世帯構成人数は、1人から、多いところでは31人のところもあったが、大半は4～5人というところであった。沖縄県出身世帯総数は4,982世帯で、計24,391人ということになり、これは日系人口全体の53.44%に相当する。

他方、“沖縄人”世帯数は5,180（日系世帯総数の46.47%）に対し、“内地人”世帯総数は5,967（同53.53%）で、世帯数で見ると、“沖縄人”世帯の方が数の上では少ないが、これを世帯構成員数で見ると、逆に3.44%上回る結果となる。

すなわち、平均世帯構成員数をみると、沖縄出身世帯の場合が4.89人であるのに対し、沖縄以外出身世帯の場合は3.56人という結果となる（表49参照）。

これらの結果を1966年調査時の結果と比較すると、家族数に変動があり、現在の

方が一世帯あたりの家族数が減っている。1966年の調査対象者数は32,002人、これは世帯数にすると5,954世帯で、一世帯あたりの家族平均は4.09人であった。

**世帯主：** 1989年の実態調査では“世帯主”については特に定義することをせず、各世帯の回答者の任意に任せることとした。結果からみると、世帯主の基準としては、単に経済的要因だけでなく、その他文化的な要因も加味されていることが推測される。

世帯主についての回答があったなかでは、男7,369人(81.60%)、女1,661人(18.39%)という集計結果がでた。男女差が大きいのは、男尊女卑的な家長制度が強く残っていることを示している。といっても、世帯内に配偶者や成人の男がいながら、女が世帯主と回答されたケースも複数に記録されている(表50参照)。

今回の実態調査で回答のあった世帯主の世代をみると、圧倒的に二世が多く、その数は6,477人、全体の71.72%を占める。次いで多かったのが三世、一世の世代で、それぞれ1,515人(16.77%)、1,011人(11.19%)となっている。

一世の世代に属する者が世帯主と回答があったなかで、その約44%、2,311人が経済活動からは退いた身にあることは強調するに値する。すなわち、これも日系社会に古くからある特徴の一つで、家庭内では経済的要因より年配者が最も権威があるという考え方が反映されていると思われる。

更に、世代別人口では三世の世代が最も多く、世帯主は三世の親の代である二世の場合が多いという結論もだせる。

最後に、日系人の配偶者であることということで、非日系人も家族として考慮されており、その数を考えると、回答のあった世帯主には男女合わせて、2,117人の非日系人がいると推計される。調査対象世帯11,147世帯のうち世帯主につき回答のあったは9,030件であり(表50参照)、従って、非日系人世帯主は全体の11.99%を占めることになる。

表50 世代、性別世帯主

世代	男	女	計	%
一世	751	260	1,011	11.20
二世	5,276	1,201	6,477	71.72
三世	1,317	198	1,515	16.78
四世	25	2	27	0.30
計	7,369	1,661	9,030	100.00
%	81.61	18.39		100.00

a. 10. 死亡率と出生率 本調査にあたり人口動態推移に関する推計値を求めるとともに、今後の専門調査の参考データとする目的で、日系人口の死亡率や出生率といった指数を求めするために、その点に関してのデータを収集、処理分析を行なった。

**死亡率** この点に関しては、性別、年齢別及び世代別に死因を調査した。これに対する回答は6,657件あったが、それによると、死因としては病死が最も多く、回答のあったうちの79.10%に相当する5,366件記録された。次に、老衰が11.80%、786件。事故死が6.80%、453件。その他、自殺、他殺等横死や死因不明が2.23%、149件記録されている。

これらの結果からまず明白なことは、死因として最も多いのは病死である。同時に事故死が多いことや、また“その他”に該当するケースが比較的多いのも注意を引かれる。

全体的にみると死亡者数に男女差があることがわかる。すなわち、死因としてあげられている各ケースにつき男の該当者が女のそれを上回っている事実が判明した。回答数全対の65.13%に相当する4,336人は男であるのに対し、女は34.85%に相当する2,320人という集計結果がでている。死因別絶対数でみると、男の場合、病死3,338、老衰514、事故死345、その他87と、いずれも女の死者数を上回っているが、相対的には病死による死者は女80.95%、男78.14%で、女の方が病死によるケースの比率が高いという結果がでた（表5-1参照）。

死因として病死が最も多いことから、病死と答えたケースにつき年齢、性別、世代別に分類を行なってみた。その結果、表5-2に示すとおり、年齢別では、0～4才に死亡率が高く1,067人、病死者全体の20.26%が記録されている。その後は25～29才の年齢層までは病死者の数は徐々に減り、年齢層30～34才から70～74才までの範囲で徐々に増加、そのあと再び減っている。ほとんど全ての年齢層で、男の方が女より病死者が多いという結果がでている。

表5-1 性別・死因別死者数

死因	男	%	女	%	無回答	計	%
病死	3,388	78.14	1,878	80.95	0	5,266	79.10
老衰	514	11.85	272	11.72	0	786	11.81
事故死	345	7.96	108	4.66	0	453	6.81
その他	87	2.00	62	2.67	0	149	2.24
無回答	2	0.05	0	0.00	1	3	0.04
計	4,336	100.00	2,320	100.00	1	6,657	100.00
%		65.13		34.81			100.00

また、表5.2から表5.5に示す世代別病死者数をみると、三世以下ではそれほどはなくなるが、男女差が顕著で、いずれの場合も男の方が女より数のうえで上回っている。

一世の世代では、0～4才(5.64%)の年齢層と60～79才の年齢層に比較的高い病死による死亡率が記録されている。一方、二世の世代では、0～4才の年齢層の死亡率が20.75%と最も高く、これは一世の世代の同年齢層と比較しても明らかに高い数字である。また、40～44才から55～59才までの年齢範囲に死者数が増えている。

三世及び三世以下の世代では、男女差は少ないが、いずれの世代でも、0～4才の死亡率が高く、545件、全対の72.66%を占めている。5才以降50～54才の年齢層までは、減少傾向を示している。

以上の結論として、日系社会では、死因別死者数に大きな開きがあり、最も多いのは病死となっており、死亡年令としては0～4才の年齢層に最も多く、特に、これは二世、三世及び四世以降の世代に顕著であると、指摘できる。

また、男女差も大きく、病死者は男に多い。また世代別でみると、一世の世代では老衰による死者は、60才以上の死亡ケースに回答ケースがあるのに対し、二世の世代では40才以上に現われている。三世の世代では、病死が数のうえで最も多く、年令的には、0～4才の年齢層に最も多く発生している。

最後に、病死が死因の場合の病名の指摘は、各回答者の意志に任せたため、具体的な病名の回答があったケースは少なかった。この点について回答のあったなかでは、ガン、心疾患が最も多かった。

表 5 2 年令・性別病死者数

年令	男	女	無回答	計	%
0-4	598	469	0	1,067	20.26
5-9	63	56	0	119	2.26
10-14	43	42	0	85	1.61
15-19	49	47	0	96	1.82
20-24	47	55	0	102	1.94
25-29	43	38	0	81	1.54
30-34	68	50	0	117	2.22
35-39	109	62	0	171	3.25
40-44	163	87	0	250	4.75
45-49	214	92	0	306	5.81
50-54	250	102	0	352	6.68
55-59	277	111	0	388	7.37
60-64	323	123	0	446	8.47
65-69	289	127	0	416	7.90
70-74	328	131	0	459	8.72
75-79	268	117	0	385	7.31
80-84	144	100	0	244	4.63
85-89	84	52	0	136	2.58
90-94	20	11	0	31	0.59
95-99	2	4	0	6	0.11
99以上	3	0	0	3	0.06
無回答	4	2	0	6	0.11
計	3,388	1,878	0	5,266	99.99

表 5 3 年令・性別病死者数：一世

年令	男	女	計	%
0-4	100	55	155	5.64
5-9	2	0	2	0.07
10-14	2	0	2	0.07
15-19	1	2	3	0.11
20-24	3	6	9	0.33
25-29	5	7	12	0.44
30-34	14	9	23	1.86
35-39	25	26	51	0.84
40-44	50	26	76	2.77
45-49	95	34	129	4.70
50-54	107	29	136	4.95
55-59	161	56	217	7.90
60-64	257	92	349	12.70
65-69	238	103	341	12.41
70-74	313	127	440	16.01
75-79	265	115	380	13.83
80-84	144	98	242	8.81
85-89	82	52	134	4.88
90-94	20	11	31	1.13
95-99	2	4	6	0.22
99以上	3	0	3	0.11
無回答	4	2	6	0.22
計	1,893	854	2,747	100.00



表 5 4 年令・性別病死者数：二世

年令	男	女	計	%
0-4	213	154	367	20.75
5-9	30	30	60	3.39
10-14	27	25	52	2.94
15-19	33	28	61	3.45
20-24	34	36	70	3.96
25-29	25	24	49	2.77
30-34	42	34	76	4.30
35-39	78	31	109	6.16
40-44	109	59	169	9.55
45-49	118	55	173	9.78
50-54	141	71	212	11.98
55-59	116	55	171	9.67
60-64	66	31	97	5.48
65-69	51	24	75	4.24
70-74	15	4	19	1.07
75-79	3	2	5	0.28
80-84	0	2	2	0.11
85-89	2	0	2	0.11
90-94	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0.00
99以上	0	0	0	0.00
計	1104	665	1769	99.99

表 5 5 年令・性別病死者数：三世及び三世以降の世代

年令	男	女	計	%
0-4	285	260	545	72.66
5-9	31	26	57	7.60
10-14	14	17	31	4.13
15-19	15	17	32	4.26
20-24	10	13	23	3.06
25-29	13	7	20	2.66
30-34	11	7	18	2.40
35-39	6	5	11	1.46
40-44	3	2	5	0.66
45-49	1	3	4	0.53
50-54	2	2	4	0.53
55-59	0	0	0	0.00
60-64	0	0	0	0.00
65-69	0	0	0	0.00
70-74	0	0	0	0.00
75-79	0	0	0	0.00
80-84	0	0	0	0.00
85-89	0	0	0	0.00
90-94	0	0	0	0.00
95-99	0	0	0	0.00
99以上	0	0	0	0.00
計	391	359	750	99.95

出生率： 本項目の調査対象者は母親のみに限った。この回答を世代別に分類することにより、各世代の母親につき平均出産数を得ることができた。

この結果を示したのが表5 6から表5 8であるが、それにより世代ごとの傾向が把握できる。まず、出産期間については、一世の世代が1 2年間と最も長く、次いで2世、3世の順となり、それぞれ7年、3年という結果である。

出産回数についても世代別で格差があり、一世の世代では、平均5人強の子供を出産しているのに対し、二世は平均3人強、三世及びそれ以降の世代は2人強となっている。しかしながら、ここで考慮に入れておくべきことは、三世及びそれ以降の世代では年令的にこれからまだ出産の可能性があると考えられることである。

また、結婚後第一児出産までの期間にも世代により格差がある。一世と三世の世代では、同期間は1.46年から0.95年に縮小されている。しかしながら、結婚年令と第一児を出産した年令には世代別格差はほとんどなく、一世と三世の場合が平均2 1才から2 3才、二世の場合には平均2 3才から2 5才となっている。なお、一世と三世の場合の平均年令が一致していることは興味深いことである。

出産期間と出産回数に世代別格差が認められるのは、主に、学歴の違い、職を持っているといった点や、総体的な生活システムの変化によるものと思われる。一世の世代の母親の大半は農村地域出身者で、それなりの年代になってから都市に生活の場を変えたのに対し、次世代の大半は都市で生まれ、都市型の考え方を身につけながら育てていることを配慮する必要がある。

表5 6 出産率と世代

世代	第一児 出産年令 (平均)	最後の子供を 出産した年令 (平均)	出産期間
一世	23.67	36.17	12.49
二世	25.1	32.41	7.31
三世	23.45	27.24	3.79

表 5.7 世代別子供の数

世代	現在の年齢 (平均)	子供の数 (平均)
一世	70.76	5.34
二世	49.78	3.48
三世	26.85	2.20

表 5.8 結婚から第一児出産までの期間

世代	結婚年齢	第一児 出産年齢	期間 (年)
一世	21.97	23.43	1.46
二世	23.84	25.08	1.24
三世	22.55	23.50	0.95

b. 社会・経済面

b.1. 職業 経済人口は、国際的基準に従い、年令的に15才から64才迄の人口とし、また被扶養者の人口は15才以下と64才以上該当者とすると、日系社会における経済人口は29,967人で日系総数の65.65%。一方、被扶養者人口は15,677人で、34.35%という数値になる。

調査対象となった経済家族単位の一部をなす非日系人数も考慮すると、経済人口は35,026人に対し、被扶養人口は16,567人となり、総数に占める比率はそれぞれ67.89%、32.11%である。

しかしながら、1989年の調査では日系社会の労働力の実際値を把握することを目的とし、日系社会では上記の国際的年令基準は当てはまらず、経済人口の年令範囲は15才より遅い年令から始まり、経済活動からの引退も64才以上の年令に発生していると想定した。

調査結果によると、経済的活動に従事していると答えた者は全体の38.44%に相当する17,548人で、うち男11,399人、女6,146人と集計された。このうち94.36%、すなわち、16,560人は有職者と回答した者で、男女別では男10,821人、女5,739人。アルバイトをしていると回答した者は414人で、全体の2.35%、失業中との回答は574件、全体の3.27%記録された(表5.9参照)。

表5-9 職 業 (1989年)

職業状況	男	女	計	%
有 職 者	10,821	5,739	16,560	94.37
失 業 中	319	255	574	3.27
アルバイト	259	155	414	2.36
計	11,399	6,149	17,548	100.00

しかしながら、先にのべたように、非日系人も今回の調査対象となっており、表5-9をセクター及び職種別経済人口分布(表6-0)と対比させると、有職者総数は20,086人で、うち15,986人が日系人、4,100人が非日系人であることがわかる。ということは、日系社会の真の労働人口は、調査対象者数全体(51,593)の38.93%を占めていることになる。

表6-0では、11の経済活動部門と9の職種を考慮し、その分布状況をみてみた。これによると、最も多いのはサービス業で、経済人口全体の37.94%、7,621人がなんらかの形でこの部門に従事している。次いで商業で、28.75%、5,774人が従事。“第3次”部門といわれるこれら両部門は、古くから日系人が最も集中している部門である(表6-1参照)。

なお、両部門に従事している者の経済人口全体に占める比率は、1966年70.11%、1980年67.2%、1989年66.69%と推移している。

一方、生産業への従事者数は、2,014人で、経済人口全体の10.02%を占める。1966年及び1980年のこの数字をみると、それぞれ10.36%、11.3%で、今回の調査時には若干減少していることがわかる。

その他、従事者が比較的集中している部門としては、農業、教育、輸送業があり、それぞれの従事者数及び比率は、農業1,221人(6.08%)、教育1,075人(5.35%)、運輸業663人(3.30%)となっている。

農業部門は、一世が移民してきた当時は最大の雇用口となっていたが、時の経過とともに、日系社会における農業従事者は徐々に減ってきた。これを過去の統計データと合わせみると、1934年28%、1940年21.1%、1966年9.34%、1970年8.9%、1980年11.8%、そして1989年6.08%と推移している(表6-1参照)。

同様に、畜産業への従事者の比率推移をみると、1940年には1.8%であったのが、1966年には10.19%に増加、その後1970年以降は下降し、同年5.4%、1980年2.9%、1989年1.03%となっている。

農業及び畜産業従事者の日系経済人口全体に占める比率は減少してきているが、これ

表 6 0 活動部門・職種別経済人口分布

部門/職種	事業主	会社員 公務員	役員者	職工・ 技術者	自由職業者	自営業	不動産 所得等	家族が経営 する事業の 手伝い	その他	計	%
工 業	492	953	244	116	7	81	7	113	1	2,014	10.02
商 業	2,404	1,948	306	15	7	461	19	614	—	5,774	28.75
サービス業	2,815	2,762	411	60	131	620	58	763	1	7,621	37.94
輸送業	19	170	11	6	—	42	6	7	—	261	1.30
農 業	772	83	13	27	1	10	3	312	—	1,221	6.08
畜産業	100	63	8	5	2	12	1	17	—	208	1.03
建設業	13	67	13	23	13	17	1	—	3	150	0.75
医療関係	22	453	29	4	117	24	9	5	—	663	3.30
教 育	28	886	30	20	33	48	30	—	—	1,075	5.35
軍・警察	—	122	22	80	1	—	18	1	1	245	1.22
その他	10	161	45	41	3	34	358	1	1	654	3.25
無 回 答	2	29	1	10	—	9	141	—	8	200	0.99
計	6,677	7,697	1,133	407	315	1,358	651	1,833	15	20,086	100.00
%	33.24	38.32	5.64	2.03	1.57	6.76	3.24	9.13	0.08	100.00	

総人口 : 51,593  
 経済人口 : 20,086  
 経済人口/総人口 : 38.93

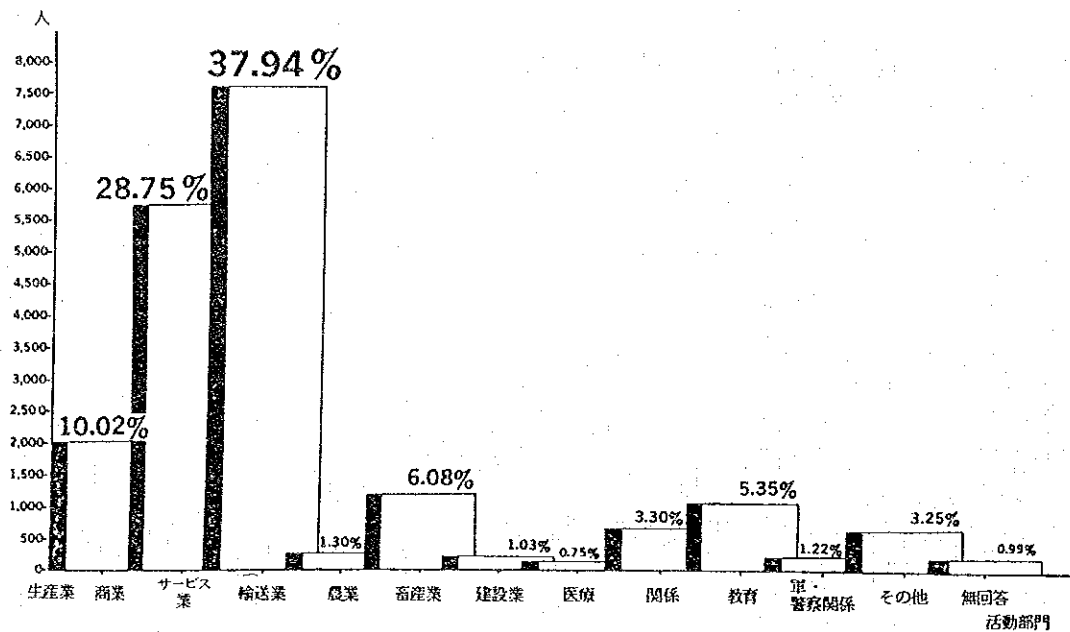
らの部門において日系人が従事していることには違った意味がある。特に、野菜、果物及び生花栽培分野(1)にはかなりの数の生産者が今も記録されているが、これらの分野の農業従事者は、生産者であると同時に、生産物の商業化をも行なっている点は特記すべきである。農産物の商業化と養鶏生産者が同様に商業化まで行なっている分を合わせると、農畜部門は、事業主として商業部門に携わっている活動分野としては2番目に多いことになる。これについては先にいってみることにしよう。

表 6 1 日系経済人口活動部門別比率推移

部門	1934 %	1940 %	1966 %	1970 %	1980 %
農 業	28.0	21.2	9.34	8.9	11.8
畜産業	—	1.8	10.19	5.4	2.9
工 業	8.4	13.7	10.36	5.1	11.3
“第三次産業”	63.5	60.2	70.11	80.5	67.2
商 業	—	—	(25.45)	—	(32.2)
サービス業	—	—	(44.66)	—	(35.0)
無 回 答	—	2.9	—	—	6.7
%	99.9	99.8	100.00	99.9	99.9

出所：森本アメリカの調査報告書「ペルーにおける日系社会：人口と職業」  
 フォード財団、リマ、1981年6月の27頁 表16による。  
 (1) 日系農業従事者に関しては1989年の総合調査の一環として特別プログラムを組み、責任者荒木 ラウル人類学専門家の下、現在調査中である。

《図10》 日系経済人口：活動部門と職種



他方、畜産部門では、そのほとんど全てが養鶏業に従事しているが、状況は前出の農業の場合と同様である。数こそ減っているが、日系人生産者が完全にこの分野から姿を消したわけではない。また、経済的規模という点からみると、生産より商業化の方が規模が大きい。事実、全国的にみて最大シェアを占めるところまでには至らないが、日系人による鶏肉の商業化は過去10年間ペルー社会において重要な位置を占めている<sup>(1)</sup>。

教育部門、医療関係及び建設業従事者では、専門家として従事しているケースが多い。同様に、輸送業従事者の中には、日系または非日系親族が輸送会社の社主であたり、主に都市部での輸送用の車両所有者となっている者がかなりの数を占める。

軍・警察関係者は、日系人女性と婚姻している非日系人のケースが大半である。

職種 日系経済人口の職種では、最も多いのが会社員で、経済人口全体の38.32%に相当する7,697人がこれに該当する。これに、公務員(5.64%、1,133人)、労務者(2.03%、407人)及び家族が経営する事業を手伝っている者(9.12%、1,833人)<sup>(2)</sup>を加算すると、

<sup>(1)</sup> 筆者が1980-1981年に実施した調査によれば(同報告書は1987年と1989年に発表)、本部門で日系人が社主となっている企業は2社記録され、今回の調査開始時点でも操業を続けていた。

<sup>(2)</sup> “家族経営の会社、店等の手伝い”は数としてはかなり記録されている。これは、通常、家族の商売(レストラン、パン屋、雑貨商等)をフルタイムまたはパートで手伝い、報酬を受けているケースである。